



TITLE:

人文 第60号

AUTHOR(S):

CITATION:

人文 第60号. 人文 2013, 60: 1-53

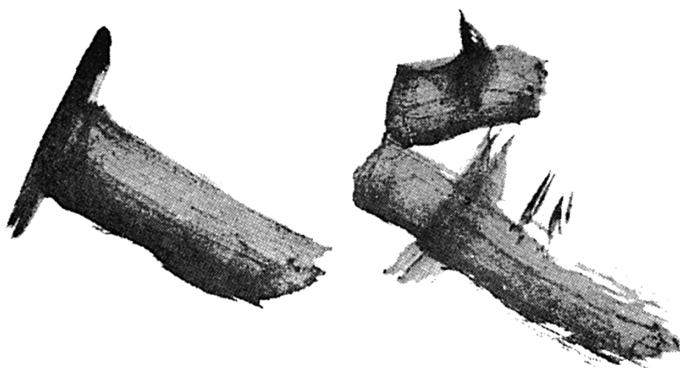
ISSUE DATE:

2013-06-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/176481>

RIGHT:



第 六 ○ 号



2013

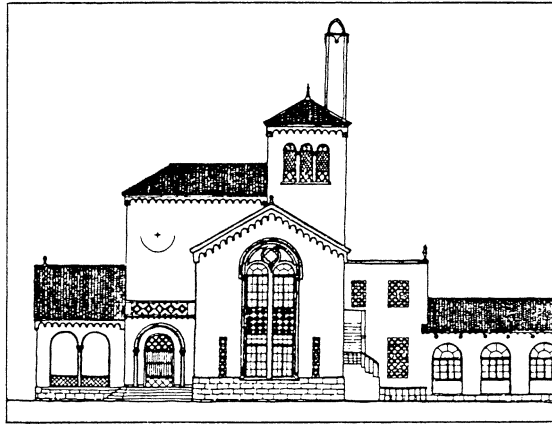
京都大学人文科学研究所

ISSN 0389-147X

人 文 第 六 〇 号

2012年4月—2013年3月

も く じ



随想

ルートの想い出

寺山修司と故郷の想像力

講演

夏期公開講座

ザジと三人の少女―レーモン・クノー『地下鉄のザジ』

(久保昭博)／西鉄電車を歩く―松本清張『点と線』(安

岡孝二)／文学の中のレゲンスタウファー『イタリア紀行』

と『鉄道事故』(クリステイアン・ウィッテルン)

講演会ポスターギャラリー二〇一二

彙報

共同研究の話題

「イスラムの東・中華の西」と中国ムスリム

王と酒

中国の「社会経済制度」なるもの

所のうち・そと

敷居と金槌

油槽船チフリスと出会う

「玩物喪志」雑感

名前を聞かれて百万遍

書いたもの一覧

1

麥谷 邦夫

藤井 俊之

9 9

17

25

31

40

ルートの想い出

麥谷邦夫

今では、電子メールやWEBといったインターネット上のアプリケーションは、我々の生活や研究にとって欠くべからざるものとなっている。しかし、わづか二十年ほど前には、人文系の研究者の間ではインターネットの存在すら十分には知られていなかった。この時代に研究所の情報インフラの整備に携ったものの一人として、今や知る人も少なくなった当時のことをいささか回想しておきたい。

私が研究所に赴任してきた一九八一年頃は、計算機のたぐいといえば、いわゆる高機能電卓、ワープロ、マイコンそしてメインフレームと称されるIBMを筆頭とする大型計算機が存在していた。このうち、小型の演算装置であるマイコンは、個人でも手が出る価格のものが出現して次第に普及し始めた時期にあたる。私はアマチュア無線を趣味のひとつとしていたので、こういったものが好き者の間で流行り始めていたことは知っていたが、まさか自分が使うことになろうとは思ってもしなかった。



当時、私は研究上の必要から『真誥』という漢籍の一字索引を作成したいと思っていた。この頃の一字索引作成といえは、膨大な数のカードをとって、それを一枚一枚手で並べかえて作るものであった。『真誥』は分量からいえば二十巻程度のものでそれほど大部な書物ではないが、それでも作業を始めてみると前途遼遠、日暮れて道遠しの感に迫られた。この状況を突破するには、当時ようやく漢字の処理ができるようになった計算機の力に頼る以外に方法はないというのが私の出した結論であった。こうして私と計算機との長い付き合いが始まったのである。


九十年代に入ると、学内にLAN（現在のKUNSHIの前身）が張られて、高速での通信環境が整い、インターネット接続が可能になった。このころには、研究所の中でも、ワープロ代りにパソコンを利用する人が増え、さらにはデータベースや文献処理に活用する人も出てきた。こうした中で、インターネットに接続して、メールやホーム・ページなどを活用したいという要求が次第に強くなってきた。

インターネット上のメールやホーム・ページを利用するには、そのためのサーバーが必要である。サーバーを立てるには、いわゆるIPアドレスとともにドメイン・ネームを取得する必要がある。現在の人文研のドメイン・ネームであるzimbun.kyoto-u.ac.jpは、当時日本部の助手をしていた安富歩氏が、自前のサーバーを立てるために取得したものである。このような



基礎の上に、研究所の最初のメール・サーバーである yas.zinbun.kyoto-u.ac.jp が東一条の本館に設置された。yas という名称はいうまでもなく安富氏に由来するものである。

サーバーには管理者（ルート）が必要であり、いきがかり上私とその役を引きうけることになった。この仕事は結構面倒なもので、サーバーの設定から始まって、ユーザーの登録や抹消、日常的なメンテナンスやハード・ディスクのクラッシュなど不測の事故からの復旧作業等をしなければならなかった。メールはすぐに研究所のインフラとして活用されるようになったので、何かあると休みの日にも復旧作業に出てこざるを得ないような事態も度々生じたのである。

メール・サーバーが順調に運用できるようになると、今度は必然的に WEB サーバーを立てたくなる。当時、私は個人的に WEB サーバーを運用していたので、その経験をもとに研究所のホーム・ページの雛型を  の上に作成し、外部からの閲覧はできないかたちで研究所内部のみに公開していた。このことは、やがて所のお偉方の耳に入り、勝手にこのようなものを作成するのはけしからんということで、お目玉を頂戴する羽目になった。しかし、研究所の情報発信の手段として、ホーム・ページを作成し公開することが有用かつ必要であるとの認識はすぐに共有されるようになり、私の作成した雛型をもとにしたものが正式に作成されて公開されることになった。こうして、研究所の教員の作成したデータ・ベースなどが次々と WEB 上



で公開されて、多くの研究者の利用に供されることになった。
現在では、メール・サーバーもWEBサーバーも専属の職員
によって、日常的に管理運用されているが、こうした体制が取
られるようになったのはここ数年来的ことである。最初のころ
は、安富氏や私などがいわばボランティア的に管理運営に携っ
てきたが、インターネットの急速な発展とそれに伴うさまざま
なセキュリティ上の問題の発生は、このような牧歌的なやり方
を許容することを不可能とした。二〇〇〇年に安岡孝一氏が大
型計算機センターから漢字情報研究センターに來られたのを機
に、研究所のサーバー管理者としての私の役割は終わりを告げ
たのである。

寺山修司と故郷の想像力

藤 井 俊 之

マツチ擦るつかのま海に霧ふかし
身捨つるほどの祖国はありや

この三月に石川県の羽咋に行く機会があった。知り合いの先
生方と院生たちで集まって、日本の文学作品について語りあう、



といつても堅苦しいものではなく、ようは皆で歓談することを目的とした合宿のようなものだったわけだが、そこで銘々が好きな作家や作品を取り上げ、思い思いのことを議論しては三日ほどの時間を過ごした。金沢から鈍行で一時間ほど、気多大社という縁結びで有名な神社のほかには、これといつて見るものもない海沿いの街には、季節外れの場違いな御一行でなければ、家族あるいは夫婦連れか、中年女性の団体客しか見当たらず、もしロビーに出れば、そうした女性客たちが、地方の観光ホテルによく見られる安売り服のかかったハンガーを取り巻き、自分を姿見に映してはポーズをつける寂寥感溢れる光景にでくわすことになる。窓の外にひろがる眺めも終日単調で、晴れているとも曇っているともつかない灰色の空に地の果てまで覆われているかのような、日本海側特有の薄明るい雰囲気包まれながら、議論は毎夜十二時すぎまで続けられた。

冒頭にあげた歌は、その際に取り上げた寺山修司（一九三五—一九八三）の唯一の長編小説「あゝ、荒野」に第一章のエピグラフとしておかれている彼自身の短歌である。この歌がいつ書かれたものかを僕自身は知らないのだけれど、二十二の年にだされた第一歌集「空には本」に既に収められているところからすれば、比較的はやい時期に書かれたものであるらしい。ほかにも「長編叙事詩 李庚順」などに引かれているのをもみても、寺山自身、この歌にはずいぶん愛着をおぼえていたように思える。「身捨つるほどの祖国はありや」。そう嘯吹く彼の生い立ち



に、母親に捨てられた経験のあることを指摘したところで、寺山風によれば、「こんな分析は、なにも真実を語っていやしないのだ」(「ラジオによる叙事詩 犬神歩き」)、ということになるだろうか。

とはいえ、親を捨てること、もつと言えば、故郷をなくしてしまうことをいかに肯定するかが、彼の著作や演劇の実践を貫く大きな関心事であつたろうことは、その言葉の端々から読み取れる。寺山には「家出のすすめ」というそのものずばりのタイトルをもった評論集もあるし、彼の発明中最も人口に膾炙した「書を捨てよ、町へ出よう」とは、歴史の伝統(書物あるいは家)を捨て、出来事の世界(肉体あるいは市街)に身を投じることのすすめであつた。

その言葉どおり、彼のキャリアは、歌壇の天才としてのデビューから文筆家としての名声を経て、最終的に演劇の実践へと向かうことになる。それは、歴史の進歩の幻想にとらわれた想像力が袋小路におちいり貧困化してゆく事態を横目に、その直線的短絡から脱して、いかにして地理的平面のうえに再度ひとびとの想像力を組織できるかを試そうとするものでもあつた。時間的過去をひとつの事実として固定化することで、それにしばられ続ける歴史的思考法を避け、過去を空間的なものと捉え、現在からの距離として測定することをつうじて、そこに人間の想像力を働かすことのできるイメージの領域を創りだすこと、これこそが寺山の地理的思考法の目指すところであつた。そし



て、そのような想像力が発揮されるためには、まず第一に故郷が捨てられねばならないのである。「歴史のユートピアは、過ぎてきた日のなかにはなく、汽車の窓べに痛くなるまで頬を押しつけて眺める、距離のデイスプレー——走りゆく田園風景のなかにある、というのが、私の出発点になっていた」（「歴史」）。

彼が演劇実験室「天井桟敷」を設立するのは一九六七年、「あゝ、荒野」はその前年の一九六六年に出版されている。これ以後の彼は、俳優への指示書きとしての台本を書くことも徐々に少なくなり、観客をも巻き込んだ出会いの偶然性を一つの原理とするような演劇実践へと没入してゆくことになる。つまり、文化の記憶喪失こそ彼の求めたものであった、と言ってもそう見当はずれのことではないだろう。

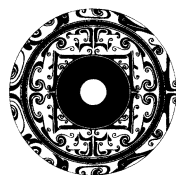
青森時代の寺山少年は、いつもひとり便所に隠れて「誰か故郷を想わざる」をハーモニカで吹いていたそうである。この曲を「吹いているうちに、私は胸の中が熱くなってきた、女学生のむっちりした腰のことや、性をめぐる二、三の妄想や、トロツキー、E・H・カーなどの政治書からも全く解放されて、まるで子供のように空っぽになってゆくのを感ずるのであった」（「書を捨てよ、町へ出よう」）。現実の故郷にいながらあり得べき故郷を想う彼の心のうちは、みすばらしさに押し包まれた郷里の閉塞感を打ち破らんとする想像力に満たされていたように思える。そして、青森をはなれて都会の荒野にたち、初めてふ



るさとを想うことになったとき、寺山はそれを想像上のふるさととして、空白のノスタルジীর対象として、自身の核に置いたのではなかっただろうか。



講演



夏期公開講座

名作再読―鉄道

―いま読んだらこんなに面白い (7)

ザジと二人の少女

―レーモン・クノー『地下鉄のザジ』―

久保昭博

今回の共通テーマは「鉄道」である。しかしこのテ

ーマの下で、レーモン・クノーの代表作『地下鉄のザジ』（一九五九年）について話せといわれるとじつはかなり困ってしまう。というのも、この小説には地下鉄が登場しないからである。

この逆説的な題名をもつ小説の主人公は、ザジという名の少女だ。彼女は、首都の名物である地下鉄に乗ることを夢見て地方都市からパリにやってきた。しかしながらオーステルリッツ駅に降り立った彼女を待ち構えていたのは、これも首都の名物ストライキだ。理不尽な仕打ちに憤慨するザジ。そこから物語は、あたかも暴走する少女のフラストレーションに振り回されるかのように展開する。ザジをつけ回す正体不明の男、相手かまわず発情する中年女性ムアック未亡人、女装の踊り子を生業とし、ホモセクシユアル（ザジによると「ホルモセシユアル」）の疑惑がかかる伯父ガブリエル、そしてザジが物語る父親殺しの物語――酔った父は娘に襲いかかるうとして妻に惨殺された――等々、この作品には、奇妙な性と暴力が満ちあふれているのである。

この点から興味深いのが、『ザジ』と同時代に誕生した二人の虚構の少女である。ひとりクノーが造形したサリー・マールというアイルランド人。彼はこの若い女性になりすまし、『皆いつも女に甘すぎる』（一

九四七年）と『サリー・マール』の日記』（一九五〇年）を書いた。処女作『はまむぎ』以来、クノーはその小説をすべて文芸出版の最大手ガリマール社から出版していたが、サリー・マール名義のこの二作だけは、スコレピオン社を選んだ。これはボリス・ヴィアンの『墓に唾をかける』の発行元として知られる出版社である。『皆いつも……』の前年に発表され、どぎつい性と暴力の描写によって話題となったこの小説は、ヴィアンがヴァーノン・サリヴァンという偽名を用い、同時代のアメリカ小説の翻訳物という触れ込みで売り出したものだ。友人ヴィアンの「成功」に触発されたのだろうか、クノーもまた、サリー・マールという仮面をかぶり、ただし同時代のアメリカではなく一九一六年のダブリンで起きたイースター蜂起に題材をとって、ヴィアンと同様バルブ・フィクションのパロディめいた作品を発表したのであり、さらにその数年後には、日記という形式を通じて、思春期の少女の乱暴な性を内面から、しかしこの作家らしい乾いたユーモアをきかせて描いたのであった。サリーをザジの「姉」と見なすことは、それゆえあながち間違ではないはずだ。

もうひとりの、より近かつより有名な同時代人、それはロリータである。じつは同名の小説と『ザジ』

のあいだには、やはり出版をめぐってあまり知られていない接点がある。ナボコフの小説が出版されたのが一九五五年の秋、版元はパリに拠点を置き、「前衛とボルノの守護神」として知る人ぞ知るフランスのオリンピア・プレスである。程なくして、この小説は少女と中年男の性愛というスキャンダラスな内容ゆえ一躍有名になる。『ザジ』が発表されるのは、フランス政府による発禁処分などをめぐって、「ロリータ」が社会現象にまでなったまさにこの時期なのである。『ザジ』がクノーの小説としては前代未聞の商業的成功を収めた背景には、こうした事情があるのかもしれない。事実、『ザジ』は出版から数ヶ月後に最初の英訳版が出版されるのだが、その版元は他ならぬオリンピア・プレスであり、英訳者は同時期に『ロリータ』の仏訳（一九五九年にガリマール社から出版）を手がけていたエリック・カハンであった。既に十年以上前からこの小説の構想を練っていたクノーがナボコフの小説に影響されたとは考えにくい、クノーとナボコフという二人の技巧派小説家のあいだで、一種の共鳴関係が生じたと考えすることはできるだろう。

『ロリータ』と同様、『ザジ』もまた言葉と世界についての問いを数多く含んだ書物である。クノーはそれを、法や秩序が通用しない異世界を現出させるという

かたちで提示した。「偽警官」トルスカイオンや次々と現れる「自転車巡査」など、法の番人たる警察が現れるときに常に怪しさがつきまとうのはその象徴であるし、また外国人観光客に「大ガイド」ともてはやされるガブリエルが案内するパリは、名所となる建造物の同定ができない意味^{カサ}方向^ンのあやふやな街となる。そして、登場人物の紋切り型的な発言により、常識的な秩序がこの世界に介入しようとするときに、「オケツブー！」と叫んでそれを阻止するザジは、この「あべこべの世界」を必死で守ろうとする少女のようにも見てくるのである。こうしてみると、最後にもうひとりの少女がザジの仲間として浮上する。それは、「不思議の国」の少女アリスである。彼女はまた、現実世界を拒否しつつ、夢や無意識といった内面世界の欲求を充足させることを望んだシュルレアリストにわたっての「守護聖女」であった。ザジには、かつてクノーが加わったシュルレアリスムの精神も受け継がれているのである。

西鉄電車を歩く

——松本清張『点と線』——

安岡孝一

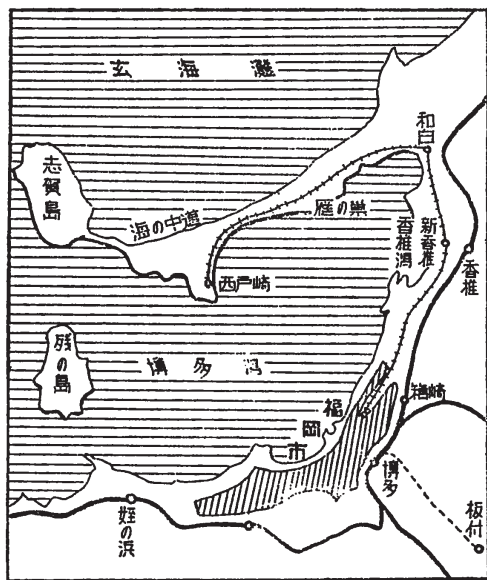
松本清張『点と線』（雑誌『旅』昭和三二年二月号「昭和三三年一月号初出」）に登場する鳥飼重太郎は、福岡署古参の中年の刑事なのだが、西鉄電車の乗り方がすこぶる奇妙だ。福岡署から香椎に向かう際に、西鉄の箱崎電停と競輪場前駅の間を、何度も歩いて乗り換えている。しかし、箱崎電停と競輪場前駅は、直線距離にして一七〇メートルは離れているのだ。歩いて乗り換えるにしては、あまりに遠すぎる。

昭和三二年当時であれば、福岡署のある県庁前電停から、競輪場前へと向かうには、西鉄福岡市内線の24系統か25系統に乗ればよい。乗り換え無しに、路面電車一本で競輪場前まで行ける。福岡市内線は当時三円均一だったので、箱崎まで乗っても、競輪場前まで乗っても、同じ一三円。わざわざ箱崎から一七〇メートルも歩いて乗り換えるのは、時間と労力の無駄だ。なのに、なぜ鳥飼重太郎は、県庁前から競輪場前へ直

奇妙と言えば、鳥飼重太郎が、西鉄香椎駅と国鉄香椎駅の間を、何度も歩いて確かめるシーンは、鉄道ファンの中からすると、すこぶる奇妙だ。両駅の間を六分間で歩く、ということ自体は確かに正しい。しかしそこには昭和三二年当時、西鉄の踏切があつたはずなのだ。西鉄宮地岳線は単線なので、運悪く西鉄香椎駅での列車交換にひつかかつてしまつたりすると、下りと上りの両方の電車を踏切で待つことになる。そうなると、六分間で歩くのは無理だ。にもかかわらず鳥飼重太郎は、この踏切の存在を全く意に介しておらず、両駅間を歩くのに必要な時間が変化しうる、という事実を計算に入れていない。福岡署古参の刑事らしからぬ判断だ。

もちろん、松本清張が『点と線』という作品中に、箱崎や香椎といった地名を登場させたのは、『旅』という雑誌の性格上、必要なことだったに違いない。その結果、鳥飼重太郎という登場人物が、多少なりとも奇妙な行動をとったとしても、許されることなのかもしれない。しかし『点と線』は、あの「四分間の空白」でも知られるとおり、いわゆる鉄道ミステリーの嚆矢なのだ。その中で、鳥飼重太郎だけに、合理的でない鉄道の使い方を許すわけにはいかない。不合理な

ら不合理なりに、その理由は明らかにされるべきだろう。



そのヒントとなりそうなのが、『旅』昭和三年三月号一一五頁、『点と線』連載第二回の福岡周辺地図だ。この地図は、『点と線』の雑誌初出にだけ使われていて、単行本には使われていない。それもそのはず鉄道ファンならば、この地図が昭和三年のものではないことに、すぐ気づくからだ。西鉄香椎駅が「新香椎」になっている。西戸崎と和臼が国有化されていな

い。雁の巣飛行場が存在している。どう考えても、昭和一〇年代の地図ということになる。ただ、板付飛行場は昭和二〇年以降なので、その部分だけ追記した可能性が考えられる。

この福岡周辺地図を描いたのは誰なのか。『旅』編集部すなわち日本交通公社は、昭和三二年に、こんな古い地図を準備したりしないだろう。挿絵を担当した佐藤泰治のサインもないので、佐藤泰治でもなさそう。となると、やはり松本清張本人が、この地図の版下を描いた可能性が最も高い。そう考えると、この地図は、清張の記憶の中の福岡に、昭和三二年時点の「板付」が追記されている、とも考えられる。

清張の記憶の中の福岡、と書いたのには理由がある。清張は、昭和八年末から昭和九年五月頃にかけて、博多の島井オフセット印刷所に、住み込みで働いていたからだ。その頃、まだ西鉄は設立されておらず、福博線（西新町～県庁前～東町～千代町～箱崎～工科前）は東邦電力の、宮地岳線（新博多～新香椎～和白～宮地岳）は博多湾鉄道汽船の路線だった。

島井オフセット印刷所の最寄り電停は東町で、箱崎や工科前へは路面電車一本で行けたが、新香椎へ行くには、どこかで電車を乗り換える必要があった。当時、福博線から宮地岳線に乗り換えるには、工科前電停か

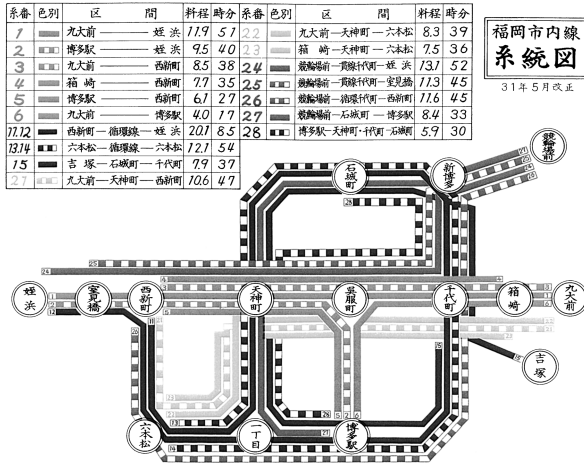
ら箱崎松原駅へ歩くか、箱崎電停から箱崎宮前駅へ歩くか、いずれでも徒歩三〇〇メートルの乗り換えだった。清張が、福博線から宮地岳線への乗り換えに、好んで宮崎宮の参道三〇〇メートルを、箱崎電停から箱崎宮前駅まで歩いていたとしても、昭和九年頃ならば何の不思議もない。

また、昭和九年頃であれば、新香椎駅と国鉄香椎駅の間の踏切には、遮断機も警報機もなかった。清張が、この踏切のことを、ほとんど意識していなかったとしても、不思議ではない。電車は新香椎駅で速度を落としているし、清張も、踏切で電車の通過を待ったりしなかっただろう。

しかし、昭和三二年だと、そういうわけにはいかない。西鉄香椎駅の踏切には遮断機が設置されているし、箱崎宮前駅と箱崎松原駅は廃止されているからだ。昭和二九年三月に、宮地岳線の起点は競輪場前へと移り、新博多・箱崎宮前・箱崎松原の各駅は、福岡市内線に移管されて電停となってしまった。同時に、福岡市内線が競輪場前まで直接乗り入れられるように、新博多と千代町に亘り線が建設された。

こうして、昭和三二年を舞台とする『点と線』では、鳥飼重太郎が、奇妙な行動をさせられる結果となった。ありていに言えば、鳥飼重太郎の乗る西鉄電車は、昭

和九年頃の福博線・宮地岳線なのだ。だから、西鉄香椎駅の踏切など気にしないし、香椎へ行くのに、つい箱崎電停で降りてしまう。しかし、昭和三年の宮地岳線に、箱崎宮前駅は存在しないので、いきおい一七〇メートル先の競輪場前駅まで、歩いて乗り換える羽目になってしまったわけである。



文学の中のレゲンズタウフ

——『イタリア紀行』と『鉄道事故』

クリスティアン・ウィッテルン

ミュンヘンから直線で約二〇〇km北に進み、レゲンズブルクからレゲン川に沿って少し上流へ溯ると、レゲンズタウフ (Regenstauf) という、人口一万五千人ぐらいの小さな町がある。この町は全国紙の新聞に登場することはほとんど無いが、レゲン川の両岸に横たわる野趣に富んだ風景は、ドイツの詩人の帝王、ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ (一七四九—一八三二) を強く惹きつけた。ゲーテは一七八六年、イタリアへ出発した翌日に、レゲンズタウフを通過した。彼の旅行日記『イタリア紀行』の九月三日には、次のような記述がある。「明るくなる頃にはシュワネンドーフとレゲンズタウフの間にいたが、ここで農地の良い方向への変化に気づいた。もう山塊の風化ではなくて、肥沃で雑多な土壌だ。レゲン川は、古代からドナウ川の干満の影響を受けている。その貯水池のような役割をはたした地域が、現在の農業の基盤とな



っている。」

しかし、現在のレゲンズタウフへ行くなら、別の文学作品を記念した揭示板が目にとまるはずだ。「一九〇六年五月一日にレゲンズタウフ駅で鉄道事故が発生しました。ホーフ行きの列車には文人でノーベル賞受賞者のトーマス・マン（一八七五—一九五五）が乗っていました。トーマス・マンの短編小説『鉄道事故』は、その体験に基づいて書かれた作品です。」揭示板

のイラストでは、

事故のように見えるが、実際は乗客には全く負傷者は無く、運転士など二人が軽いケガをしただけで済んだ。

この作品にはドイツ帝国の社会構造がよく反映されている。出発前のミュンヘン中央駅では、強い「父なる国家」が、階級

社会を支配しているさまが伺える。『鉄道事故』の語り手は、ドレスデン行きの夜行特急に乗り込む。すると、列車の窓から、駅のプラットフォームで、二等の車両に乗りうとしている「すり切れた黒いコートを着たばあさん」が「革の負い紐をして、いかつい下士官の髭」を生やした車掌に叱られて三等に乗るありさまや、「モノクルをはめて、靴にスパッツを付けた、意志の強そうな表情の紳士」が、車掌の目を盗んで無断で犬を寝台車に連れ込むといったできごとを観察している。

発車してから暫くの間、読書をしていた語り手は、やがて休む支度を始めた。車内でも自宅にいるように安心して寝られるだろうと考えていたその時、突然大きな衝撃がある。手に持っていたバッグはどこかへ飛んでいってしまい、語り手自身も肩から壁に叩きつけられた。

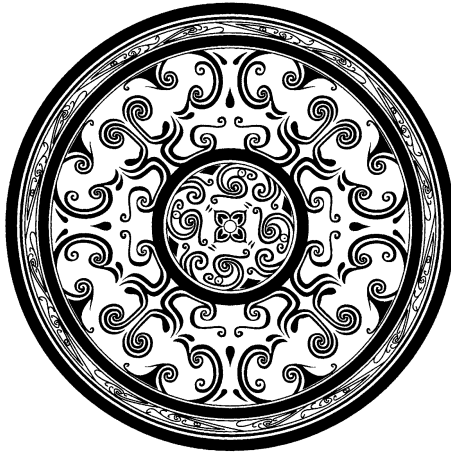
今までの、整頓され保護されていた安全な状態は、予告なしに混乱の極みに変わった。隣の車室に乗っていた「スパッツの紳士」は、「たすけてくれー」と叫ぶと、乗客が駆け集まった廊下にパジャマ姿で飛び出し、そのまま車外へ出てしまう。先ほどまで権威の体現であった「下士官髭」も、帽子を無くして「膝が痛い！」と叫ぶばかりで、乗客の安否確認をしようとは

しない。乗客は次々と線路の横に降りたが、語り手は何よりも先頭車両の貨車に預けてある荷物の中の、時間をかけて書き上げた原稿が心配だった。前の方は全て壊れている、という噂を聞いて、彼の望みはすっかり奪い去られてしまう。そして、七万マルクを超える高価なマッファイ社製の蒸気機関車までもが全壊していたのだった！

そこからの救助を得て、状況は徐々に回復の方向に向かい、「父なる国家が体面と名望を取り戻すにいたった」。実は大した被害は無いし、怪我人もほとんどいない。暫くすると乗客は全員、救援列車で次の駅まで乗って行くことになるのだが、ここでは階級社会はもう取り戻せない。三等の「すり切れたコートのおばさん」も、「スバツ紳士」も、みな語り手と同じ車両に乗り、一等の車両は人を満載して「まるで共産主義のようだ」。次の駅で特急列車に乗り換えて、最終的に語り手は、三時間遅れで目的地のドレスデンに着いた。

短編小説『鉄道事故』は、百年以上まえに書かれた作品だが、今読めば、まるで第一次世界大戦と、大戦により余儀なくされた変革を予告しているかのような印象がある。それにしても二人のドイツ文学の王者、ゲーテとトーマス・マンの作品に登場していながら、

それ以外にはほとんど知られていない町など、他にはあるまい。いったいどんな町なのか、何時か見に行きたいと思っている。



京都大学人文科学研究所
『ヨーロッパ(現代思想と政治)』 第
公開研究会

市田良彦 著
(片山由佳子 訳)

『革命論』
マルチチュードの政治哲学序説
をめぐって

コメンテーター
國分功一郎・小泉義之・研究班員
広澤
市田良彦

2012年4月21日(土) 14:00~18:00
人文科学研究所セミナー室1
参加無料・聴講歓迎

講演会のお知らせ

Conférence de Bertrand Binoche
Professeur de l'Université de Paris 1
"L'opinion publique en Révolution française"

ベルトラン・ビノシュ 講演
パリ第一大学哲学科教授
「フランス革命期における
<opinion publique>概念の動揺」

2012年4月13日(金) 15時~18時
(フランス語・通訳あり)

会場：京都大学人文科学研究所
本館1階 セミナー室2

四月

国際ワークショップ
グローバル化するセックスワーク
オーストラリア×韓国×台湾×日本

●日時：5月18日(金) 会場 18:00 開演 18:30 閉演 19:30
●場所：京都大学人文科学研究所 本館4F 大会議室
●参加費：参加費 5000円(税別) 会場費 1000円(税別)
●申込先：京都大学人文科学研究所 人文科学研究センター
国際文化研究部国際文化研究センター 国際文化研究班
〒606-8501 京都府京都市左京区吉田本町1-1
〒606-8501 京都府京都市左京区吉田本町1-1
〒606-8501 京都府京都市左京区吉田本町1-1

●申込先：京都大学人文科学研究所 人文科学研究センター
国際文化研究部国際文化研究センター 国際文化研究班
〒606-8501 京都府京都市左京区吉田本町1-1
〒606-8501 京都府京都市左京区吉田本町1-1
〒606-8501 京都府京都市左京区吉田本町1-1

1893年シカゴ万国宗教会議と
日本仏教

2012年5月18日(金)
18:30~20:00

会場：人文科学研究所 本館4F 大会議室

講師：市田良彦 著

五月

20世紀前半 東アジアにおける人の移動

5/17(土) 18:00 開演 19:30 閉演
5/24(土) 18:00 開演 19:30 閉演
5/31(土) 18:00 開演 19:30 閉演

会場：京都大学人文科学研究所本館セミナー室1

2012 KYOTO LECTURES
Wednesday, June 6th, 18:00h

Emiko Ohnuki-Tierney SPEAKER

Many Meanings of Cherry Blossoms
Communicative Opacity in Political Spaces

六月

講演会
ポスターギャラリー
二〇一二

文学カフェ
公開例会「東京マツハ」
番外編

京大マツハ

第二芸術の逆襲

米光一成
長嶺有
藤野可織
堀本裕樹
千野帽子

2012年11月24日(土) 14:30-17:00

参加無料
予約不要

会場：京都大学文学部附属書庫5階3会議室

十一月

公開研究「フランス革命—1793年の研究」(読者・著者共著)

講演会のお知らせ

日時：2012年10月23日(火) 午後3時から
会場：京大人文科学研究所 本館1階 セミナー室2

講演：バトリス・ゲニエール氏
(フランス社会科学研究院)

「フランス革命における暴力と恐怖」

- ・講演はフランス語・通訳あり
- ・後援費あり

当日は、本会事務局の代表、研究員諸君以外でご参加を希望される方は、事前に事務局にご連絡ください。

講演者：バトリス・ゲニエール氏
講演者：バトリス・ゲニエール氏
講演者：バトリス・ゲニエール氏

交錯するアジア

新近代コリアに創れる
文化交錯の構図

9月27日(土) 稲葉 穂
10月10日(火) 二宮文子
10月11日(水) 堀尾一史
10月18日(水) 井谷麻由

日時：2012年11月30日(金) 9:30-17:30
会場：京都大学文学部附属書庫5階3会議室

公開研究「フランス革命—1793年の研究」(読者・著者共著)

講演会のお知らせ

2013年1月25日(金) 午後3時より
京大人文科学研究所 本館1階セミナー室2

Bruno Bernardi

Rémanence d'une figure rousséiste : opinion publique, mort et censure dans le discours de Jean Debry du 23 septembre 1794

ブリュノ・ベルナルディ
「ルソー的形象の保存：ジャン・ドブリーによる公論・審判・監禁論 —1794年9月23日の演説をめぐる—」

講演はフランス語・通訳あり

当日は、本会事務局の代表、研究員諸君以外でご参加を希望される方は、事前に事務局にご連絡ください。

講演者：ブリュノ・ベルナルディ氏
講演者：ブリュノ・ベルナルディ氏
講演者：ブリュノ・ベルナルディ氏

一月

人種神話を解体する

Demystifying the Race Myth

会場：2012年12月15日(土) 16:00-18:00
会場：2012年12月16日(日) 10:00-12:00

講演者：山本 浩二氏
講演者：山本 浩二氏
講演者：山本 浩二氏

十二月

第2回 在米中国語学教育研究ワークショップ

在台灣日本語歴史資料の保存と利用

日時：2012年11月30日(金) 9:30-17:30
会場：京都大学文学部附属書庫5階3会議室

講演者：山本 浩二氏
講演者：山本 浩二氏
講演者：山本 浩二氏

イコン、焼香、弘法大師

—19世紀英国における日本仏教のイメージ—

Icons, Incense and Kobo the Wonderworker
Images of Japanese Buddhism in Nineteenth-Century Britain

講師：カチア・ドルチェ
(ロンドン大学東洋アフリカ学院・准教授)

司会：奥山直司(高野山大学・教授)

3月8日(金) 18:00-20:00
京都大学文学部附属書庫5階3会議室
聴講無料・申込不要

(講師は英語で発表されますが、日本語要旨が配られます。質疑応答は日本語でなされます。)

京都大学文学部附属書庫5階3会議室

三月

Crossing Boundaries

Art and History II

2013.2.23(土) 13:30-17:30 (8時12:00～)
会場：京都大学文学部附属書庫5階3会議室

講演者：山本 浩二氏
講演者：山本 浩二氏
講演者：山本 浩二氏

京都大学人文科学研究所
 麥谷邦夫教授 退職記念講演会
**道教教理思想の
 形成と道気論**

2013年3月21日(水) 15:00~16:30
 聴講：京都大学人文科学研究所附属東洋学・人文学部研究センター
 1500-0001 京大総合学術センター501号室(5F) 5F 507号室(5F) 507号室(5F)
 電話：075-753-6000 E-mail: shirayama@kyoto-u.ac.jp

講演者：麦谷邦夫教授
 講演題目：道教教理思想の形成と道気論
 講演要旨：道教の教理思想は、漢代から唐宋にかけての長い歴史の中で、儒教、仏教と交流を繰り返しながら形成されてきた。その中でも、道気論は道教の教理思想の核心をなしている。本講演では、道気論の形成過程を、漢代の黄老思想、唐宋の道教思想、明清の道教思想の順に追ってみたい。また、道気論の形成過程の中で、道教の教理思想がどのように変化したのか、についても追ってみたい。

講演者：麦谷邦夫教授
 講演題目：道教教理思想の形成と道気論
 講演要旨：道教の教理思想は、漢代から唐宋にかけての長い歴史の中で、儒教、仏教と交流を繰り返しながら形成されてきた。その中でも、道気論は道教の教理思想の核心をなしている。本講演では、道気論の形成過程を、漢代の黄老思想、唐宋の道教思想、明清の道教思想の順に追ってみたい。また、道気論の形成過程の中で、道教の教理思想がどのように変化したのか、についても追ってみたい。

清華の三巨頭
 新しい中国学の始まり

2013年3月19日(火) 10:30~16:00
 会場：学術総合センター 一階講堂
 講演者：王国維、陳寅恪、趙元任
 講演題目：清華の三巨頭 新しい中国学の始まり
 講演要旨：清華大学の三巨頭、王国維、陳寅恪、趙元任の業績と、新しい中国学の始まりについて。王国維は、清華大学の創立者であり、中国学の第一人者。陳寅恪は、清華大学の教授であり、中国学の第一人者。趙元任は、清華大学の教授であり、中国学の第一人者。彼らの業績は、中国学の発展に大きく貢献した。本講演では、彼らの業績と、新しい中国学の始まりについて追ってみたい。

Crossing Boundaries
 Art and History III
 <日本人>を演説する—人間文化を名義的対象

YES, this is a beautiful American girl
 in the arms of a Japanese boy!

2013年3月13日(水) 12:30~17:45 京都大学人文科学研究所附属東洋学・人文学部研究センター 501号室(5F) 507号室(5F) 507号室(5F)
 講演者：田中道子教授
 講演題目：Crossing Boundaries Art and History III <日本人>を演説する—人間文化を名義的対象
 講演要旨：田中道子教授の講演。田中道子教授は、京都大学人文科学研究所附属東洋学・人文学部研究センターの教授であり、中国学の第一人者。本講演では、田中道子教授の講演について追ってみたい。

2013 KYOTO LECTURES
 Wednesday, March 27th, 18:00h
 Wybe Kuiter SPEAKER
 Cherries of Kyoto
 Some Hidden History

Wybe Kuiter is a Dutch author, historian, and journalist. He has written several books about Japan, including 'Cherries of Kyoto' and 'Some Hidden History'. He is currently living in Kyoto and is working on his next book. He is also a member of the Kyoto University of Education and is a frequent speaker at the university's lectures.



彙報

おくりもの

金文京教授は第九回角川財団文芸賞を受賞（二〇一一年十二月五日）。

訃報

上山春平名誉教授（九一歳）は、八月三日逝去。

田中淡名誉教授（六六歳）は、十一月十八日逝去。

人のういき

。高木博志准教授（人文学研究部）は、当研究所（人文学研究部）教授に昇任（四月一日付）。

。ウィッテルン・クリスティアン准教授（附属東アジア人文情報学研究センター）は、当研究所（附属東アジア人文情報学研究センター）教授に昇任（四月一日付）。

。麥谷邦夫教授（東方学研究部）の、附属東アジア人文情報学研究センター長

併任を解除（四月一日付）。

。富谷至教授（東方学研究部）は、附属東アジア人文情報学研究センター長を併任（四月一日～二〇一三年三月三十一日）。

。土口史記を助教（附属東アジア人文情報学研究センター）に採用（四月一日付）。

。藤本幸夫は、客員教授（文化研究創成研究部門、四月一日～二〇一三年三月三十一日）。

。JACQUET, Benoit Marcel Maurice フランス国立極東学院京都支部長は、客員准教授（文化研究創成研究部門、四月一日～二〇一三年三月三十一日）。

。加藤和人大阪大学大学院医学系研究科教授は、客員教授（文化研究創成研究部門、四月一日～二〇一三年三月三十一日）。

。武上真理子人間文化研究機構地域研究推進センター研究員は、客員准教授（附属現代中国研究センター、四月一

日～二〇一三年三月三十一日）。

。VITA, Silvio イタリア国立東方学研究所長は、特任教授（四月一日～二〇一三年三月三十一日）。

。稲本泰生を准教授（東方学研究部）に採用（五月一日付）。

。小川佐和子を助教（人文学研究部）に採用（二〇一三年二月一日付）。

。小野容照を助教（人文学研究部）に採用（二〇一三年三月一日付）。

。久保昭博（人文学研究部）助教は、辞任の上（二〇一三年三月三十一日付）、

関西学院大学文学部准教授就任。

。黒岩康博（人文学研究部）助教は、辞任の上（二〇一三年三月三十一日付）、

天理大学文学部歴史文化学科助教就任。

。日下渉（人文学研究部）助教は、辞任の上（二〇一三年三月三十一日付）、名

古屋大学大学院国際開発研究科准教授就任。

。麥谷邦夫（東方学研究部）教授は、定年により退職（二〇一三年三月三十一日）。

海外での研究活動

。王寺賢太准教授（人文学研究部）は、

文部科学省科学研究費補助金により二〇一二年七月二九日東京発、Piermont Morgan Library に於いて十八世紀政治経済学資料調査を行い、国立図書館に於いて十八世紀通商・植民地史資料調査を行い、ケベック州立図書館に於いて国際十八世紀学会幹事会に参加し、八月二七日帰国。

。高田時雄教授（東方学研究部）は、二〇一二年八月一日大阪発、蘭州大学敦煌学研究所に於いて研究生に対し講義及び指導を行い、甘肅省内の研究所及び図書館等に於いて敦煌写本の調査研究を行い、二〇一三年一月三十一日帰国。

。古勝隆一准教授（東方学研究部）は、二〇一二年四月一日大阪発、ミュンスター大学に於いて中国思想史研究の共同研究を行い、二〇一三年三月十二日帰国。

外国人研究員

。FANSELOW, Frank ブルネイ・ダ

ルサラーム大学学科長

アジアにおける民族紛争と表象との相互関係についての研究

（文化生成研究客員部門）

受入教員 田中教授

期間 五月七日～九月十四日

。RAVINA, Mark エモリー大学教授

日本近世史・近代史

（文化連関研究客員部門）

受入教員 岩城准教授

期間 八月十五日～

二〇一三年一月十日

。薩日娜 上海交通大学科学史与科学文化研究院准教授

東アジアにおける西洋数学受容の研究

（文化生成研究客員部門）

受入教員 武田教授

期間 十一月七日～

二〇一三年二月六日

。BLISSE, Leonard ライデン大学名誉教授

アジアの通商ネットワークと社会秩序

（文化生成研究客員部門）

受入教員 籠谷教授

期間 十一月十日～

二〇一三年五月十日

。陳偉 武漢大学教授

日本木簡学の比較研究

（文化連関研究客員部門）

受入教員 宮宅准教授

期間 二〇一三年一月十八日～

七月十七日

招へい外国人学者

。張 景俊 高麗大学校文科大学国語国文学科副教授

日本と韓国の漢文訓読に使用される符号の比較研究

（文化生成研究客員部門）

受入教員 金教授

期間 四月一日～八月五日

。林 素清 中央研究院歴史語言研究所研究員

中国古代青銅器の銘文研究

（文化生成研究客員部門）

受入教員 岡村教授

期間 十月二九日～十一月十一日

。聶 德寧 厦門大学南洋研究院教授

バタヴィア・カピタン文書による華人通商ネットワーク研究

（文化生成研究客員部門）

受入教員 岩井教授

期間 十二月十日～

二〇一三年五月三十一日

外国人共同研究者

。李 大和 建国大学校韓国台湾比較史
研究所研究員

戦時下朝鮮の防空体制と朝鮮社会の変
容

受入教員 水野教授
期間 二〇一一年四月二二日～

。金 惠淑 建国大学校韓国台湾比較史
研究所研究員

植民地朝鮮の商取引における度量衡制
の混在様相に関する研究

受入教員 水野教授
期間 四月一日～

二〇一三年三月三十一日

。Schermann, Sylke Ulrike

青島旧蔵ドイツ語文献中の法制関係資
料の調査

受入教員 岩井教授
期間 二〇一〇年五月一日～

二〇一三年三月三十一日（継続）

。許 瓊丰 台湾中央研究院台湾史研究
所博士後研究

戦後神戸における台湾人商人の真珠事
業—その経済的・社会的活動

受入教員 籠谷教授
期間 七月四日～八月三十一日

。STORM, Kerstin ミュンスター大学
PD研究員

法律と文学・晩唐における「判」のレ
トリック

受入教員 富谷教授
期間 七月十七日～

二〇一三年一月二十六日

。TAJAN, Nicolas トウールーズ第二
大学博士課程学生

日本の「ひきこもり」についての心理
学的・社会的文化的研究

受入教員 立木准教授
期間 十月五日～二〇一三年十月四日

。DISTEFANO, Anthony Salvatore
カリフォルニア州立大学フルトン校
助教

日本における性的マイノリティに関わ
る暴力

受入教員 田中教授
期間 二〇一三年一月七日～八月六日

。金 大鎬 国史編纂委員会編史研究士

日本支配期朝鮮在住日本人地主・企業
家・官僚に関する研究

受入教員 水野教授
期間 二〇一三年三月十五日～

十一月十四日

外国人研究生

。TAJAN, Nicolas
社会的ひきこもりの日仏比較研究

受入教員 立木准教授
期間 二〇一一年四月一日～

八月三十一日

。陳 彦君

岡倉天心におけるアジア主義の再考
受入教員 山室教授

期間 四月一日～七月三十一日

東アジア人文情報学研究中心講習会

。二〇一二年度漢籍担当職員講習会（初
級）

第一期（十月一日）

オリエンテーション 富谷 至
漢籍について（四部分類概説を含
む） 井波 陵一

カードの取り方—漢籍整理の実践

土口 史記

第二日（十月二日）

工具書について 高井 たかね
実習を始めるにあたって

梶浦 晋

漢籍目録カード作成実習

第三日（十月三日）

目録検索とデータベース検索

安岡 孝一

漢籍データ入力実習（一）

第四日（十月四日）

和刻本について

文学研究科教授 宇佐美 文理

漢籍データ入力実習（二）

第五日（十月五日）

朝鮮本について 矢木 毅
実習解説 土口 史記
情報交換 井波 陵一

。二〇一二年度漢籍担当職員講習会（中級）

第一日（十月二九日）

オリエンテーション 富谷 至

経部について

文学研究科教授 宇佐美 文理

叢書部について 藤井 律之

叢書と漢籍データベース

第二日（十月三十日）

史部について 宮宅 潔
漢籍データ入力実習（二）

第三日（十月三十一日）

子部について

漢籍データ入力実習（二） 武田 時昌

第四日（十一月一日）

集部について

人間・環境学研究科教授 道坂 昭廣

漢籍データ入力実習（三）

第五日（十一月二日）

漢籍関連サイトの利用について 大西 賢人
文学研究科閲覧掛 土口 史記
実習解説 井波 陵一
情報交換

お客さま

。四月二十日 フランス極東学院長 フ

ランシスクス・ヴェレレン（岩井、

JACQUETが対応した）

。四月二五日 国家清史編集領導小組公

室主任 ト鍵 他三名（岩井、村上、

山崎、梶浦が対応した）

。二〇一三年三月十一日 フランス極東
学院長 フランシスクス・ヴェレレン
他一名（岩井、高階、麥谷が対応し
た）

。二〇一三年三月十四日 中国歴史研究
者代表団 中山大学教授 袁偉時 他
五名（岩井、石川、小野寺、高木、
武上が対応した）

。二〇一三年三月十八日 ライデン大学
学務部長 イエロン・エット ハート
他一名（ウィッテルンが対応した）

「イスラムの東・中華の西」と 中国ムスリム

中西 竜也

研究班「イスラムの東・中華の西―前近代ユーラシアにおける文化交流の諸相」が扱うのは、中央アジア・南アジアを中心とする地域において、中華とイスラムという東西の二大文明圏をも巻き込みつつ、歴史上に営々と行われてきた文化交流の諸相である。毎回の研究会では、イブン・ファキーフ（9世紀後半から10世紀はじめごろに活躍）のアラビア語地理書『諸国の書』（マシユハド写本）の「ホラーサーン」章の輪読、もしくは参加者それぞれの研究発表を通じて、当該問題をめぐる活発な議論が行われている。

さて、私自身はもっぱら中国ムスリム（漢語を日常語とするムスリム）の歴史を研究しているが、その私だが、この研究班の末席を汚すのは、第一に異文化間交渉という大テーマを共有するからである。

中国ムスリムは、かつてアジア各地から来華し定住するようになったムスリムの末裔で、明代中葉、16世

紀の初めには、中国全土各地に独自のコミュニティを築き、中国社会に定着するようになっていた。そのご彼らは、中国社会でマイノリティとして存続するために、イスラムと中国の伝統思想や社会とを調和する必要に迫られた。私の直接の課題は、その架橋的営為の実相を解明することであるが、それによって、ユーラシアの各地で見られたイスラムと他文化の交渉をめぐる理解の深化に、少しでも貢献できればと考えている。

もうひとつ、中国ムスリム社会と中央アジア・南アジアとのあいだの交流の具体相を問うことも、「前近代ユーラシアにおける文化交流の諸相」解明をめぐる私の役割のひとつと心得ている。

中国ムスリムが、その父祖たちの多くを輩出した中央アジア・南アジアと様々な文化的要素を共有していたことは、確かである。たとえば、中国ムスリムが「経典」として参照していたハナフィー派のイスラム法学文献の多くは、中央アジア・南アジアにおいても権威を有するものだった。また、それらイスラム法学文献のなかには、ペルシア語で書かれたものも多数存在した。イスラム法学文献以外にも、中央アジア・南アジアで流布する、アラビア語文法やイスラム神秘主義関係のペルシア語作品が、中国に多数伝来していた。前近代の中国ムスリム社会と中央アジア・南アジアの

ムスリム社会とは、ハナフィー派法学とペルシア語文化を共有する点で、ある程度の一体性を有していたといえる。

また、前近代に中国と中央アジア・南アジアとのあいだを往来したムスリムたちの存在も、いくらかは知られている。たとえば、17世紀末以来、中国西北部に数多のスーフィー教団が叢生したが、その縁起をいえば、中央アジアのスーフィーたちが中国西北部に到来したことや、中国西北部のムスリムたちが中央アジアへ求道に赴いたことが発端にあった。また、馬聯元（一九〇三年没）という雲南の中国ムスリム学者が、インドのカンプルに移住してそこで没したという事例が知られる。この近代の事例は、以前から中国ムスリムと南アジアのあいだに連絡があったことを想定させるエピソードである。

しかし、このように前近代の中国ムスリム社会と中央アジア・南アジアのムスリム社会のあいだにおける書籍や人間の往来が知られるいっぽうで、そのことが両社会にどんな思想的影響を与えたかという問題は、実はほとんど分かっていない。今後、是非とも検討していきたい問題のひとつである。

ところで、現在、中国政府は、国内における「イスラム主義」の影響や外国の宗教勢力の浸透にたいして

強い懸念を持っている。実際、たとえば、南アジアに起源するイスラム改革復興運動組織、タブリーギー・ジャマアトが、おそらくは中央アジア経由であろうが中国に到来し、宣教活動を行っているとの情報がある。伝統的イスラムを奉じる中国ムスリムの大部分は、そのような運動にたいして批判的なようだが、だからといって当局は、安心しない。中国ムスリムが、中央アジア・南アジア、あるいは中東のムスリムたちと交流することに、一定の警戒感を抱きつづけている。しかしいっぽうで当局は、彼らとイスラム世界との交流を通じて、中国とイスラム世界の関係強化を図ろうとする考えをも持っている。中国ムスリムと中央アジア・南アジアの関係は、イスラム主義運動や中国政府の国際戦略の行方とからみつつ、非常に複雑な様相を呈しつつあるといえる。これを、前近代・近代の情況と比較し、連続性や変化を探ってみることも、興味深いかもしれない。

王と酒

藤井正人

儀式に酒はつきものというのは日本に限ったことではない。だが、インドでは古代から現代に至るまで、タントラ秘儀などの特殊な場合を除いて、酒は儀式から遠ざけられてきた。古代インドの儀式で神々に献供され、参加者が共飲した飲みものは、酒ではなく、ソーマと呼ばれる薬草の汁である。ソーマがどのような薬草なのかは不明であるが、強い覚醒作用があるとされているので、麻黄（エフェドラ）ではないかと考えられている。私たちの共同研究「灌頂と即位の文化史」は王権儀礼を研究対象としている。古代インドの王権儀礼にはさまざまな種類があるが、注目すべきことは、祭式の枠組みに関する限り、どれもソーマの压榨・献供・共飲を伴うソーマ祭の形をとっていることである。古代インドにおいて各種の祭式がソーマ祭を中心に体系化されていく中で、王権儀礼もソーマ祭の中に編入されて、大規模な祭式として整備されたのである。代表的な王権儀礼である王即位式では、メイ

ン・イベントである王となる者への灌頂と彼の王座への着座は、ソーマ祭に共通するソーマをめぐる祭事の間に付加的に挿入されて行われている。

ところが、たいへん興味ぶかいことに、この同じ王即位式の最後もしくは終了後に、ソーマにかわって、スラーと呼ばれる酒を神々に献供し、王をはじめとする参加者が共飲する儀式が行われる。スラーは、コメの粥に大麦芽を混ぜて作ると記述されているので、どぶろくとビールの中間のようなものであったと思われる。当時の人々にとって、ソーマとスラー酒は正反対の飲みものであった。ソーマはバラモン（聖職者）の、スラー酒は王族のものとされ、ソーマは叡知を、スラー酒は愚鈍をもたらすとさえ言われている。王即位式の終わりに行われる酒祭は、ソーマ祭のソーマをスラー酒に置き換えたような式次第をとっていて、祭式のフェーズ（位相）が、それまでのソーマを中心とするものから、スラー酒を中心とするものへと転換したような様相を呈している。同じ酒祭が他のいくつかの王権儀礼の最後にも行われている。これらの王権儀礼の最後に、なぜ王は酒を飲むのか。もともと王権儀礼には酒がつきものであったのが、儀礼全体がソーマ祭へと作り変えられたために、儀礼の最後へ追いやられてしまったというだけの話かもしれない。事実、これら

の王権儀礼は、ソーマ祭にはない灌頂と酒祭を共通に伴っていることから、それら二つが王権儀礼の本来の要素であったとも考えられる。

しかし、古代のインド人はそのようには考えなかった。あるヴェーダ文献は以下のような説明を与えている。王即位式では、王は最初の献供によってクシャトリヤ（王族）からバラモン（聖職者）になる。それ以降、王はバラモンとして儀式を行い、最後の献供によってバラモンからクシャトリヤに戻る。スラー酒はクシャトリヤの象徴であるので、王はスラー酒を体内に取り込むことでクシャトリヤに戻る（『アイタレーヤ・ブラーフマナ』七・二三―二四ほか）。この説明は、けっしてその場限りの祭式解釈でなく、当時の王権と司祭権との関係を示唆する重要な言説である。古代インドにおいては、王権と司祭権は未分化でもなく、また完全に分離してもいなかった。両者は分かれてはいたが、部分的に重なっていた。儀礼中、王はバラモンになり、儀礼が終わればクシャトリヤに戻るという説明は、まさに王権と司祭権の重なりを物語っている（藤井正人・コラム「古代インドにおける王権と儀礼」『新アジア仏教史01インドI 仏教出現の背景』所収をも参照）。ただし、儀礼の上では王権と司祭権は対等ではなく、儀礼のために王のステータスをクシャトリ

ヤからバラモンへ上昇させることが、この説明の主眼である。バラモンからクシャトリヤへの変化は、儀礼的に上昇させたステータスを元に戻す復元のようなものである。

このように考えると、王権儀礼がソーマ祭の形をとっていることについても、ソーマ祭を中心とした祭式の体系化の一環という先の説明では不十分である。ソーマは神聖なものであり、神々のほかには、バラモンだけがそれにあずかることができるとされている。王権儀礼にソーマ祭の形式を取らせることによって、儀式に神聖さを付与するとともに、バラモンでない王に、ソーマにあずかることのできるバラモンと同等の聖性を与えるのが、おそらくは本当の意図であったと思われる。しかし、王は儀式後もバラモンであり続けることはできない。本来のステータスであるクシャトリヤに戻らなければならない。そのために最後の酒祭が行われる。人は現実から離れるために酒を飲むと言われるが、古代インドの王は、逆に現実に戻るために酒を飲んだと言える。

（この短文は、共同研究の班員を中心に二〇一二年十二月に開催した国際シンポジウム「古代および中世インドにおける潔斎、入門・入信、即位の諸儀礼」での発表内容の一部である。）

中国の「社会経済制度」なるもの

村上 衛

昨年四月から私が開催させていただいている研究班のテーマは「近現代中国における社会経済制度の再編」である。ここでいう「社会経済制度」の「制度」とは、社会・経済を規定してきた慣習・常識・規範・秩序・行動様式ということになる。こうした「制度」の探求の目的を単純に言えば、日本人をはじめ、外国人にとつてわかりにくい中国の社会・経済の様々な側面を理解することにある。

外国人にとつて中国、特にその内部の理解が困難であったのは、現在のことだけではない。研究班を始めるにあたり、私が挙げたミクロな事例は、一九世紀末、長江下流域の開港場であった鎮江における通過貿易制度 (transit trade system) である。通過貿易とは、外国人がアヘン以外の外国商品を国外から持ち込む場合と、中国国産品を内地から持ち出す場合に、一定の代替税 (子口半税) を支払えば、全ての内地関税を免除するという制度であり、中英の条約によって規定さ

れていた。例えば、中国製品の輸出の場合、あらかじめパスを入手し、出荷の際に通過する最初の内地関税用の関所で子口半税を支払い、その後に通過する関所における課税を免除された。こうした制度が設けられたのは、イギリスがいわゆる「自由貿易」という欧米 (実際にはイギリス) の「制度」を中国に押しつけようとした際に、最大の障碍となった中国内地の「制度」、すなわち清朝地方官僚の財源となっていた内地関税を克服するためであった。

鎮江は中国においてこの通過貿易が最も発展した開港場である。その背景には、本来外国人が利用するはずの通過貿易を、中国人商人が大規模に利用し、内地関税逃れをしたことにある。そのため、内地関税の税収維持を図る清朝地方官僚がこれを取り締まろうとしたため、条約で規定されている通過貿易を守ろうとするイギリス側と激しく対立し、一八七〇年代後半、清朝側はこれを規制するための鎮江独特のルールを制定する。

ルール制定後の一八八〇年代から二〇世紀初頭にかけて、鎮江の通過貿易は拡大し続ける。しかし、一部の例外を除き、通過貿易をめぐる中英間の紛争は発生していない。これは一見、清朝側のルールが機能せず、「自由貿易」という欧米由来の「制度」が中国の内地

に順調に浸透したかに見える。しかし、実際には、本来通過貿易が適用されて免税となっているはずの商品に対しても、内地の税関や関所において課税が組織的に行われていた。鎮江とその後背地との流通は、欧米人から名義を借りた中国人商人らが一手に引き受けており、実際の納税は彼らが行っていたから、欧米人たちはこうした組織的な課税にほとんど気づかず、また名義貸しの代償を得ていればよいので、気づく必要もなかった。イギリス領事はこの事態に気づいたものの、なすすべはなかった。結果として、通過貿易という欧米の「制度」は、内地関税を軸に形成された中国内地の「制度」に取り込まれて、本来の目的を達成することとはできず、形骸化していったのである。こうした外来の「制度」が中国に入ってきて有名無実化するの、こうした一例にとどまるものではないし、過去の事でもない。

このような中国固有の「制度」は外側から見えにくいものであるし、内側の人々にとつて書き留められることも少ないから、把握するのは非常に困難である。したがって、社会・経済の「制度」の解明のためには多くの事例を集める必要がある。しかも、さまざまな時代、地域と比較しなければ、中国固有な「制度」、持続的な「制度」であるのかの是非も分らない。当

然、個人研究だけでは対応できない。研究班の共同研究のテーマとして「社会経済制度」を選ばせていただいたのは、それが理由である。

研究班は始まってまだ一年目であるが、人文社会系の東洋史出身者と社会科学系の経済史の出身者の報告、明清史研究者・近現代史研究者の報告ごとに参加者が入れ替わり、メンバーが固定されていない。また、コメンテーターもできる限り専門に近い方をお呼びしているため、班員以外の方にも願うことも多い。結果的に、中国社会と同じように流動性の高い研究班になっているのかもしれない。とはいえ、新陳代謝が激しい分、刺激も多い。結果として様々な角度から光をあてることにより、未だ茫漠とした「社会経済制度」の輪郭を少しでもはっきりさせることができたかと考えているが、これは楽観的にすぎるだろうか。

敷居と金槌

石 井 美 保

以前、「所のうち・そと」(『人文』第五八号、二〇一年)に、インドの役所における公文書「発掘」の困難について書かせていただいた。今回はその続篇(?)として、「インドから出られなかった話」を書いてみたい。

二〇一三年二月六日の夕方。マンガロールでのひと月弱の滞在を終えた私は、南インドの玄関口の一つであるムンバイの空港にいた。その日の夜行便でムンバイから出国し、バンコク経由で日本に帰国するためである。航空会社のカウンターで搭乗券を受け取り、出国カードに記入してから出国手続きの長い列に並ぶ。列はのろのろと進み、やっと私の順番がまわってくる。出国審査官にパスポートと搭乗券と出国カードを手渡す。審査官はそのすべてをチェックして、パスポートにポンポンとスタンプを押した。やれやれ、やっと出国できる。そう思った瞬間、審査官はパスポートをもう一度じっくりと眺め、私に告げた。

「このビザは、入国から二週間以内に登録申請をする必要がある。なぜ登録をしていないのか？」

このビザは登録申請をする必要はないはずだ、と私は答えた。なぜなら、外務省のホームページにそう書いているから、と。審査官は「ちよつと来なさい」と私に合図し、奥にあるガラス張りの事務室につかつかと歩いていく。おとなしく後を追って部屋に入ると、いかにも偉そうなおじさんたち(審査官の上官なのだろう)が数人、椅子にふんぞり返っている。そのうちの一人が私のパスポートとビザをチェックして、「なぜ登録をしていないのか」と訊く。私は、登録をする必要はないのだ、なぜなら外務省の…と同じことを答える。

「登録をしなければ、出国はできない。No registration, no fly」と事務官は冷たく宣言する。途方に暮れた私は、外務省のウェブサイトを確認するよう事務官に頼むが、あいにく事務室にはコンピュータもない。事務官は再び冷徹に告げる。No registration, no fly.

詳しい顛末は省くが、結局私はこの日、インドから出国することができなかった。

こうしたビザにまつわる問題は言うに及ばず、インドの出入国管理は大変に厳しく、かつ面倒である。出国時を例にとると、まず外から空港の建物に入る際、

入り口で警備員にパスポートと航空券をチェックされる。空港の入り口付近では、スーツケースや手荷物を一度X線透過装置に通さなくてはならない。出国審査時にも再度手荷物を検査機に通し、身体検査を受ける必要がある。さらに、ターミナル間を移動するシャトル・バスに乗る際にも手荷物検査と身体検査がある。ターミナルから飛行機までの連絡バスに乗る際にもパスポート、搭乗券の確認とともに手荷物検査が済んでいるかをチェックされ、飛行機に搭乗する直前にも搭乗券とパスポートのチェックがある。一度、国内線の飛行機を降りた際に、搭乗券の半券の提示を求められたこともあった（誰かが飛行機に忍び込んでいる可能性などあるのだろうか?）。出国審査時の手荷物検査と身体検査は当然としても、その後、およそあらゆる「敷居」を越えるたびにチェックを受けなくてはならないのである。

いったいなぜ、これほどまで周到かつ執拗に、何度も検査を繰り返すのだろうか。すぐに思いつくひとつの理由は、テロ対策である。これは疑う余地がないだろう。だが私は、テロ対策のように実際の現代的目的に加えて、このきわめて手間のかかる何重ものチェックポイントの存在を支えてきたのは、おそらく植民地期あたりから綿々と受け継がれてきたある体制、

ないしは習性ではないかと想像する。官僚制。

前回、このコラムに寄せた文章で私は、一九世紀末頃から二〇世紀初頭にかけて作成されたインドの植民地行政官の手になる報告やマニュアル類の詳細さと、そうした書類の作成を支えていた行政官個々人の執念と欲望について書いた。彼らの欲望とは、自分の管轄する地域について、そのおよそあらゆる社会事象を把握し、記述し、支配したいという、なかば強迫観念的な欲望と執念であつたと思われる。一方、現在の出入国管理にみられるような煩雑なチェックのシステムは、インドを往来する人々についての情報を政府が収集し、管理するという本来の目的とは別に、いわば行為遂行的な儀礼としての側面をもっているようにみえる。つまり、個人の属性や所有物や身体を執拗にチェックし、何重もの検査のプロセスを通過させることを通して、末端の役人から上層部の官僚までをネットワークで結び、一般の人々がその支配下にあるような権力システムの姿が、役人と一般人の双方にとって遂行的に立ち現われ、想像され、確認されているのではないか。

これは、まだしもわかりやすい権力のあり方である。日本の出入国もどちらかというと面倒だが、出入国管理の体裁は、遂行的に国家の権力を立ち上げる儀礼的行為というよりも、その背後にあるはずの支配と管理

の周到なシステムを覆い隠す方向に発展しているようにみえる。たとえば、来日外国人が入国審査時に課される指紋の採取と顔写真の撮影。指紋採取と写真撮影のための機械（何という名前なのか知らないが）の上部に、桜や鳥居などの図柄とともに毛筆のような字体で描かれた「Yokoso Japan」の文字は、私には異様にみえる。そして、「出入国手続きをより迅速に」を謳い文句とした、自動化ゲート。このシステムを利用するためには、個人が自分の指紋情報を登録しておく必要があるらしい。日本の出入国管理は、個人の属性、所有物と身体をその場でチェックするのみならず、バイオ情報を長期的に管理するところにまで来ているようだ。しかし、そうしたシステムの背後にあるはずの管理と支配の企図は、「Yokoso」や「利便性」の文字で隠されている。

さて、ムンバイの空港である。この空港で、ターミナル間を移動するシャトル・バスを利用した。もちろん、バスに搭乗する前には搭乗券とバスポートのチケットに加えて、手荷物検査と身体検査がある。ようやくバスに乗り込み、車窓の景色を眺める。ふと、車の窓枠に取り付けてある赤い物体に気がつく。なんだろう？——それは「緊急用」と書かれた、いかにも頑丈そうな金槌であった。もしも乗客の中に金槌を携行し

ている者がいたならば、手荷物検査で即刻ひっかかっていたに違いない。にもかかわらず、シャトル・バスの中には「乗客用の金槌」が常備されているのである。あの厳密な検査は一体何だったのか。この脱力感が、このエッセイの題材を思いつくきっかけであった。

油槽船チフリスと出会う

伊藤 順二

二〇一二年年度末、共同研究班の有志でサラエボ、ウィーン、イスタンブールに飛び、第一次世界大戦の戦跡その他を巡った。ここでは最終日の個人的印象を中心に記したい。

荒木映子さんに同行してイスタンブールの「アジア側」のハイダルパシャ港に渡ったのは、旅行最終日の三月二九日だった。大して期待はしていなかった。ハイドルパシャを訪れる気になったのは、元はといえば、荒木さんがナイチンゲール博物館に眼を留められたからだ。ナイチンゲールは一八五四年一月からこの地

を活動の場としている。しかし博物館は事前申込が必要であり、私たちは少々準備不足だった。しかし、近隣の英軍墓地の立地状況だけでも眺められれば、と思っていた。

ナイチンゲールがクリミア戦争の傷病兵を看護した場所は、通例スクタリⅡ現ユスキュダルと記される。しかし現在のユスキュダル港は博物館からは少々遠く、ハイダルパシャ港の方が近い。「ヨーロッパ側」から二〇分足らずで、船はコンテナ搬送用の大型クレーンの立ち並ぶ貨物港の横を通り、西側と較べれば極めて閑静といえる船着場に到達する。港に接続する形で鉄道ターミナルのハイダルパシャ駅がある。駅の営業開始は一八七二年で、オリエント急行終着駅に先立っている。

この地でナイチンゲールが活躍したのは、イギリス軍の友軍であるオスマン帝国軍の兵舎があったからだ。現在もこの周辺が軍の敷地であることは変わっていない。船着場から幹線道路を歩き、坂を上ると、道の左右の広大な敷地が金網で囲われている。港寄りの陸軍病院の敷地にはアタチュルクの記念碑等が垣間見えるが、各々の門は銃を携帯した番兵に硬く守られており、部外者が気軽に入れそうな雰囲気ではない。そもそも博物館は一八五四年当時の兵舎への途上に建てられて

おり、その兵舎は現在ではトルコ共和国陸軍第一軍の司令本部となっていて、門番の他に小高い哨所からも番兵が目を見守っている。それでも門番は親切に博物館入口まで通してくれたが、予約無しでの入館は無理だった。しかし博物館に入れなくとも、私たちはもう満足していた。ハイダルパシャ墓地に道中立ち寄ることができたからだ。

墓地には人氣が無く、門に近寄ると鎖に繋がれた番犬に吠えられた。しかしすぐに墓地の門番が扉を開け、カラーで綺麗に印刷された英語の案内を渡してくれた。イーブルやソナムの戦跡で散々見たような案内チラシはコモンウェルス戦争墓地委員会（CWGC）のものであり、ベルギーや北フランスと同じく、この土地もイギリスが管理権を有している。しかし西部戦線と違い、ここは一八五五年からイギリスが管理する墓地である。

墓地は港と陸軍病院の狭間の緩やかな斜面にあり、軍の敷地と港との緩衝地帯を作るかのように細長く伸びている。人によっては入口付近の巨大なクリミア戦争記念碑と、その周囲のクリミア戦争関係の墓石を見るだけで満足してしまうかもしれない。第一次世界大戦関係の敷地はそこから空き地をおいてやや奥にある。大戦関係の敷地の奥には軍官民ごた混ぜのイギリス人

(など)の墓もあり、そのまた先にもクリミア戦争の墓石が点々とある。面積的には大戦関係は敷地の五分の一位だろうか。しかし大戦前の墓と異なり、大戦の墓は西部戦線と同様に極めて集密的に配置されている。

数百の個人墓の没年は、大部分が一九一九年から一九二二年の間だった。一九一八年秋に平和が訪れたわけではないことは散々研究してきたし、崩壊した二つの帝国が血を流し続けている一方で、双方に干渉していたイギリス軍も死者を出していることは頭では分かっていたはずだった。が、墓石を前にすると認識を改めさせられたような気もする。

私の関心の中心であるザカフカスで死んだイギリス兵士の多くは遺体もなく、墓地の壁に名前が記されているだけだった。だが数百の個人墓の所属に眼を走らせると、英本国やダブリンやオーストラリアやインドの連隊名に混じって、戦艦リヴェンジーや航空母艦アークロイヤルを始めとするイギリスの軍艦の乗組員が数十名規模で葬られていることが見てとれる。もちろんほとんどは、周辺海域に出動した英艦隊から後送された傷病兵がここに葬られたもので、撃沈された艦船のものではない。

英海軍所属艦船を示す H. M. S. の文字を追っていくうち、H. M. Oiler Tiflis の船名が眼に留まった。

チフリスとは現グルジア共和国首都トビリシを指す。油槽船チフリス号のグラハム第一機関士が、一九一九年一月に四二歳で死んでいる。チフリス号はいつこの名をつけられ、どういう戦歴をたどり、グラハム氏はどういう状況で死んだのだろうか。大まかな予想はつくし、分かっただけでしまえば墓石はネットでも見れる(<http://twgpp.org/information.php?id=1481211>) が、墓地を訪ねなければ検索する気にもならなかっただろう。ここを訪れさせてくれた荒木さんに感謝し、チフリス号についても少し調べてみたい。

「玩物喪志」雑感

稲 本 泰 生

仏像や仏画の美に吸い寄せられて研究の道を志し、四半世紀以上が経過した。というところから聞かせるが、専攻を決めた当時、迷った挙げ句、中学時代にマニアと化してなじみ深かったこの領域が、消去法で残ったというのが真相に近い。その頃、より魅惑的な

いし奥深そうにみえた、他のジャンルや藝術思想には歯が立たなかった。原点及び核心部分はアイドル、キヤラクター、フィギュア、カードの類を酷愛する人達と大差ない。一方で、それをどうにも厭わしく思う感覚に徐々に支配されていき、振り払えなくなった。

「好事家の域を超えた境地へ」という強迫観念が、公私あらゆる局面で幅をきかせた結果、豊饒なモノの世界を素直に楽しめているか、わかり辛い状態に陥って久しい。冷笑を買いそうだが、本気で「普通の仏像ファンに戻らねば」とよく思う。頼みの綱は、信仰の場と不可分の存在であるにせよ、仏像が確かな形を伴うモノだからこそ得られる安心感だ。その次元で、或いはそれを介して相手と交信しているうちは、大丈夫な筈だ。形象や色彩にまつわる良質な体験や記憶抜きに、過去の制作者や受容者の「モノに対する感覚」を客観的に復元し歴史的に跡づける学など成立しない——そんな神話まだ信奉してるの、といわれそうだ。

授業中に映写された中国石仏の姿に物珍しさを感じ、これが発端となって、後に人文研東方に居場所を与えられた。「仏恩」の語は本誌では不適切かもしれないが、分不相応な僥倖を今も夢だったかと疑う。末席を汚すこと六年余、縁あって博物館に転じ、扱う作品の過半を日本の仏像が占める「彫刻部門」の担当者として、

して、十三年を過ごした。この間携わったのは文化財に関わる調査研究、収集管理、展示活動、広報普及、生涯教育、国際交流等々。全て「真似事」に終始したかもしれない、どの程度貢献できたか心許ない。時に興行、時に難行苦行。随分不平も口にしたが、原則として業務は「本物」を中心に回っていた。その幸運にはいくら感謝しても足りない。出逢った諸尊や品々には教科書に載るような事例も多く、名を列挙するだけで偉そうな感じになる。しかし所詮「虎の威を借る」ナントカである。問題は重圧や喧噪や生活に埋没する日常の中で、作品を観察なり玩味なりする余裕を、十分保てなかった点だ。昨春現場を離れて以降、名状しがたい喪失感に襲われることがある。一方で遠目やガラス越しなのに、以前よりかえってモノがわかるような複雑な心理も展示室で味わう。本物のそばにいる特権と表裏一体をなす職責はしばしば無心の鑑賞を遮るが、身近な名品から疎外されていると焦燥を募らせたことが、実は多忙を言い訳にした時間の浪費だったと気づき、己の能力の限界に直面する。

博物館在職中、閉塞感にとらわれた時、「感情移入が容易」、それだけの理由で、未完の小説『黄昏の橋』（高橋和巳）を幾度か手に取った。主人公の男は、浮世絵を専門とする学芸員。勤務先のモデルは、私のい

た館のライバル館（少なくとも当方の意識では）。設定や内容に多少反発も覚えたが、出品交渉のあと逆方向の列車に乗ってしまい、そのまま職場に無断で数日間旅を続けて周囲の信用を失う挿話など他人事とは思えず、妄想の中で溜飲を下げた。学生運動の中で生じた事件に関わりをもち、男は次第に日常からずれていく。そこに時代の空気を感ずるが、彼は「骨董相手に生きるような人間」「無節操、無思想、無情熱」である「微みたいな」存在と自身を蔑む。コスト意識が声高に叫ばれ、「志なくしては『玩物』もままならぬ」逆説が成立しうると今どきの官立博物館（職員は非公務員型の独法）が舞台なら、作者は学芸員の自己表象と行動をどう描写したろうか。博物館における玩物の意義を説き、権利を勝ち取るべく戦うのか。玩物に現を抜かすことは民意に沿わない、独りよがりな運営の象徴と糾弾するのか。あるいは両者の間で揺れ動くのか。白けるのか。気のせいであってほしいのは、この「玩物」「博物館」の二語を「人文科学の研究」「附置研」に置換しても、さほど違和感を覚えないことだ。

大学に戻って一年経たない三月末、助手時代を送った北白川の分館に引越した。大先輩たちが思索し談論する様子が浮かび、有難くも身の縮む思いがする。何しろ『雲岡石窟』を生んだ場所である。調査時の背

景にいかなる解釈が加えられようと、また研究所がどんな将来像を描こうと、この巨冊はモノに関わる学で人文研がうちたてた金字塔であり、その価値は不朽である。これほど「志」を注入してくれる場はない。とはいえ、そもそも玩物に理屈などいらぬ筈である。「玩物喪志」の語釈の歴史を語る力はないが、「モノ」と「志」を対置するという発想自体、健全性は怪しい。「オタクのままで終われない」という気分は、「志」の要素を含んでいるかにみえて正体は煩惱であり、手前勝手な動機というほかない。自分だけがそうなのか、一種の職業病か。真に呪うべき対象は、感性の凡庸さを露呈する恐怖から逃げるようにこの袋小路に入り込む、面倒な思考回路かもしれない。

名前を聞かれて百万遍

土 口 史 記

名前の由来をよく聞かれる。初対面で聞いてくる人もあれば、しばらく交流したあとで「前々から聞きた

かったのだけど……」とおもむろに聞いてくる人もある。中国の歴史を研究することを義務づけられてきたんですね、まさにそれにふさわしい名前ですね、ご両親は学者ですか。だいたいそうした言葉が続く。

東洋史専攻の父と中国文学専攻の母が史料講読の授業で出会い、席を並べて読んだ最初の文献の名前がそれだ。やがて二人が人生の伴侶となったのち、いつか子どもの名前にしたいね、と罪のない冗談として交わされた他愛ない会話……のはずが、終に現実になってしまった。それが成功を確約する予言だったのか、人生を縛る不吉な呪詛だったのか、いまだ答えは出ていない。どちらになるか、それを決めるのは他ならぬ私自身だ、と思ってしまう時点で後者なのかもしれない。

両親は、こんな妙な提案をどちらが言い出したのか、もう思い出せないという。いや、単なる責任逃れかもしれない。「食えない研究の道に進んだら誰のせいかな」「言い出したのはあなたでしょう」と、しばしば幼い子どもだった私をさしおいて二人だけの世界に逃避している光景が、私の原初的な、もはや只の夢とも判別のつかぬほどの淡い記憶の底に残る。まだ無垢だった私は、おいてけぼりにされていることを特に寂しいとも思わず、大好きだったコンクリートミキサー車

の写真を一心に眺めたりなぜか舐め回したりしていた。その両親の優しい口論はしかしいつも、結論も出ないまま曖昧に終わり、曖昧に終わるから繰り返される。

私も成長するにつれ薄々感じてきたのだが、どうも、どちらが言いだし、そして命名したのか、二人は故意に隠しておきたいと思っているふしがある。それは二人だけの秘密を余人には教えないとする積極性なのか、それとも単に話すことが気恥ずかしいという消極性なのか、よくわからない。私自身も謎めいたままにしておいてほしいという気持ちが少しはあり（そして「謎めいた主人公」でいる自分に安っぽく酔いしれてみたりするのだ）、駆け出しの学徒として準備してはいるが研ぐほどになまぐらな実証のメスを、この問題にそつと下ろしたくなる欲求を今までは抑えてきた。

——というのは全て嘘である。実際には、漁師の息子と農家の娘が狭い田舎で出会い、中国とも司馬遷とも学問研究とも無関係なまま、「好きな漢字」というシンプルな発想の末にこの名前をつけるに至ったのであり、席を並べた授業も淡い記憶も優しい口論も、全てはいま百万遍でハンバーガーを頬張りながら妄想した。

ともかく、そういうストーリーの創作を容易に許してしまう程に、意味深な名前を付けられてしまった。

まあ、「後天的に」ではあるが、自分で中国古代史の道に進んだのだから仕方がないし、むしろこれを武器として存分に利用するべきなのだろう。

果たして効用もないではない。海外（というか、中国語圏）ではすこぶる役に立つ。何しろ、すぐに覚えてもらえるうえ記憶に定着しやすいようである。「弟の名前は漢書です」というぎこちない冗談も、なぜか予想以上に歓迎されてこちらが恥ずかしくなってしまう。「シーチー」という北京語発音が「很可愛」と評されたこともある。ともあれ、そうしたきっかけで海外にも多くの友人ができたことは何よりの財産である。

ただどうも、『史記』（むろん「あちら様」、文献のほう）の専門家と思われがちなのは心外、いや、人様に期待はずれの念を抱かせることになるので心苦しい。もとより人並みに読んでいるとは思うものの、名前から期待される程には詳しくもなく、とりわけこの道に進んでからようやくわかり始めた、文献学や史料批判の蓄積の分厚さをまえに、若輩としてただただ萎縮するばかりである。要するに名前に実力が追いついていないのだ。「名実相伴う」という決まり文句は、私にとって独特に響き、遠くてまぶしい。

正直に言うと、人格全体の一断面に過ぎない名前なるものをもって、過度に私を代表・象徴・一般化して

いただくのは困るのである。勉強不足を日頃痛感しているからか、つい「あちら様」に関する知識を問われたときの惨劇を想像してしまう。「新しい史料ばかり追いついて基本的な文献を読んでおらん」と怒られる事態はなんとも容易に予想がつく。なんと恐ろしい叱責であろうか、この感覚は私にしかわかるまい。

もうすぐ我が家にやってくる新しい小さな生命には、なるべく背負うものの少ない名前を与えたいと考えているが、さてどうなることか。もちろん、私のように予期せず何かに縛られることになるかもしれない。そのときにはせいぜいそれを活用に変じてほしい。心配は無用だろう。何せ私自身が今ここでこんなにも楽しんでるのだから。

書いたもの一覧 二〇二二年四月～二〇二三年三月 (氏名五十音順) ●は単行本)

浅原 達郎

簡王(八一山人)

命・王居・志書乃言の配列

日古 二〇号 十月
日古 二〇号 十月

池田 巧

Highlights in the Decipherment of the Nam Language.

Nathan W. Hill (ed.) *Medieval Tibeto-Burman Languages IV*. BRILL. 六月

Verbs of Existence in Tangut and Mu-nya.

Nathan W. Hill (ed.) *Medieval Tibeto-Burman Languages IV*. BRILL. 六月

ムニャ語の述詞と文 澤田英夫編『チベット・ビルマ系言語の文法現象2: 文の特徴付けと下位分類』

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 三月
《嘉絨譯語》概説『太田斎・古屋昭弘両教授還暦記念中国語学論集』 好文出版 三月

石井 美保

Acting with things: Self-poiesis, actuality, and contingency in the formation of divine worlds. HAU: *Journal of Ethnographic Theory* 2 (2) 十二月
マニワタ 井上順孝ほか編『世界宗教百科事典』

丸善 十二月

書評 東賢太朗著『リアリティと他者性の人類学—現代フィリピン地方都市における呪術のフィールドから』

文化人類学 七七卷三号 一月
パースペクティヴの戯れ—憑依、ミメシス、身体 菅原和孝編『身体化の人類学』 世界思想社 三月

石川 禎浩

政治史 岡本隆司・吉澤誠一郎編『近代中国研究入門』 東京大学出版会 八月
座談会 岡本・吉澤編『近代中国研究入門』 東京大学出版会 八月

●The Formation of the Chinese Communist Party. Joshua Fogel trans. Columbia University Press 十一月

●中国近現代史 3 革命とナショナリズム(韓国語版 孫承會訳) 三千里 一月

●近代東アジアにおける翻訳概念の展開(共編)

京都大学人文科学研究所 一月
近代日中の翻訳百科事典について 石川・狭間編『近代東アジアにおける翻訳概念の展開』 京都大学人文科学研究所 一月

●二十世紀中国的社会与文化(編著 袁広泉訳)

社会科学文献出版社 三月
走進「信仰」的年代——一九二二年反基督教運動初探 石川編
『二十世紀中国的社会与文化』 社会科学文献出版社 三月

稲葉 穰

行歴僧のルートとパミール高原 澤田稔編『近現代の中央アジア山岳高原部における宗教文化と政治に関する基礎研究』（平成23年度文部科学省委託研究成果報告書） 三月

稲本 泰生

鄭県阿育王塔の本生図と菩薩の捨身行——鑑真による模造塔將來によせて『戒律文化』八 二〇一一年三月

作品解説 特別展図録『解脱上人貞慶——鎌倉仏教の本流』

玄奘三蔵のみた仏教王国・クチャ 読売新聞大阪本社・奈良国立博物館編『シルクロード紀行——正倉院へつづく道』 四月

国立博物館編『シルクロード紀行——正倉院へつづく道』 ミネルヴァ書房 六月

作品解説 特別展図録『頼朝と重源——東大寺再興を支えた鎌倉と奈良の絆』 奈良国立博物館 七月

倉と奈良の絆

『大仏像寸法注文』と大仏蓮弁世界図の解釈に関する覚書 特別展図録『頼朝と重源——東大寺再興を支えた鎌倉と奈良の絆』 奈良国立博物館 七月

敦煌第二四九・二八五窟に描かれた神々の図像に関する試論『敦煌・絲綢之路国際學術研討會議論文集』

神戸大学大学院人文科学研究科美術史学百橋研究室 二月

敦煌第二四九・二八五窟における神々の図像の意義『美術史歴参——百橋明穂先生退職記念献呈論文集』 中央公論美術出版 三月

岩井 茂樹

International Society after “The Transformation from Civilized to Barbarian”. *Sino-Japanese Studies* 19. 四月

萬斯同と劉猷廷——書齋派とフィールドワーク派の協調

京大広報 六八一号 九月

元代行政訴訟与審判文書

歴史学文摘 二〇一二年第四期 十二月

岩城 卓二

『新しい歴史教科書』と近世史研究の課題

歴史科学 二〇九号 五月

幕末期畿内社会論の視点

日本史研究 六〇三号 十一月

西摂津社会の中の西宮・広田神社

ヒストリア 二二六号 二月

書評 小倉宗『江戸幕府上方支配機構の研究』

歴史学研究 九〇二号 二月

ウィットテルン・クリスティアン

The Digital Daozang Jiyao — How to get the edition into the Scholar's labs. *digital humanities* 2012, Hamburg

University.

七月

Digital Editions of Premodern Chinese Texts: Methods and Problems — Exemplified Using the Daozang Jiyao, *Chung-Hua Buddhist Journal* (25), Dharmadrum Buddhist College.

七月

Some observations concerning rules and the violation of rules in Chan / Zen Buddhism, Itaru Tomiya and Reinhard Emmerich (eds.) *Public Notion of Crime and Law in East Asia—Crime and Society in East Asia*, Kyoto University.

三月

Beyond TEL: Returning the Text to the Reader, *Journal of the Text Encoding Initiative* (4), Text Encoding Initiative.

三月

王 寺 賢 太

対談 日本社会の構造変革のために(湯浅誠とともに)

週刊読書人 五月十八日号

Quand un memorialiste entre dans l'histoire: à propos de la réception des *Mémoires* du cardinal de Retz chez quelques historiens français du XVIII^e siècle, dans S. Kuwase et alii. (éd.), *Les destinataires du moi*, Éditions universitaires de Dijon

六月

一仕事終えて

人文 五九号 六月

書評 〈Corps〉の所在 大橋完太郎著『デイドロの唯物論』

思想 一〇五九号 七月

Malaise dans l'Europe moderne: Aux origines de l'histoire des deux Indes de Guillaume-Thomas Raynal,

thèse soutenue à l'Université Paris Ouest-Nanterre-La Défense

七月

起源の二重化—アルチュセールのルソー『人間不平等起源論』読解(一九七二) 現代思想 四〇巻十三号 十月

No hay caminos, hay que caminar—日本の「第三の道」への疑問 情況別冊 思想・理論編 一号 十一月

私たちはいつでも逸脱できる—フーコー『カントの人間学』の射程 Art Critique 三号 一月

大 浦 康 介

「遠くを見よ」は正しいか 現代のことば

京都新聞 七月一七日

エア・エア 現代のことば

京都新聞 九月一日

ネタバレ 現代のことば

京都新聞 十一月六日

集団生活 現代のことば

京都新聞 一月一日

●フィクション論への誘い—文学・歴史・遊び・人間(編著)

世界思想社 一月

受験国語 現代のことば

京都新聞 三月一二日

岡 田 曉 生

指揮者はどうして必要なのか 『まごころ』とのつきあい方

13歳からの大学授業』 水曜社 四月

吉田秀和とは誰だったのか(片山杜秀との対談)

アルテス 二号 十月

岡村 秀典

六世紀のソグド系響銅―和泉市久保惣記念美術館所蔵品の調査から(共著) 史林 九五卷三号 五月

鏡からみた漢と倭の交流 鳥取県埋蔵文化財センター編『海を渡った鏡と鉄―青谷上寺地遺跡の交流を探る』 九月

古代中国の農業と食文化 NHK「中国文明の謎」取材班編『NHKスペシャル中国文明の謎』 NHK出版 九月

中国文明とその源流を探る―考古学からのアプローチ

紅萌 二二号 九月

KURENAIコンテンツ紹介 静脩 四九卷三号 十月

中国最古の宮廷儀礼を再現する NHK「中国文明の謎」取材班編『中夏文明の誕生―持続する中国の源を探る』

講談社 十二月

後漢鏡における淮派と呉派 東方学報 八七冊 十二月

名工杜氏伝―後漢鏡を変えた匠 岡内三眞編『技術と交流の考古学』 同成社 一月

漢王朝と倭 柳田康雄編『弥生時代政治社会構造論』 雄山閣 二月

小野寺 史郎

翻訳 桑兵「辛亥革命期の知識と制度の転換」 辛亥革命百周年記念論集編集委員会編『総合研究・辛亥革命』 岩波書店 九月

翻訳 劉世龍「白話文と社会動員」

同前

一九世紀末日中における「記念」の語義変化について 石川

禎浩、狭間直樹編『近代東アジアにおける翻訳概念の展開』 京都大学人文科学研究所 一月

南京国民政府時期的党歌和国歌 石川禎浩編『二〇世紀中国的社会与文化』 社会科学文献出版社 三月

南京国民政府時期的党歌和国歌 石川禎浩編『二〇世紀中国的社会与文化』 社会科学文献出版社 三月

籠谷 直人

帝国と商人ネットワーク 社会経済史学会編『社会経済史学の課題と展望』 有斐閣 六月

菊地 暁

一九六八年『新京都学派の終焉?―あるいは、新京都学派を「再領有」するために』 慶應義塾大学出版会HP 四月

日韓海女写真史略―続・誰がために海女は濡れる

日本学 三四号 五月

桑原武夫の何がそんなに偉いのか?―「歴史家・桑原武夫」を考える 慶應義塾大学出版会HP 六月

桑原武夫の東北―その「フィールドワーク」を考える 慶應義塾大学出版会HP 九月

石田英一郎の戦中・戦後―二枚のハガキから 神奈川大学国際常民文化研究機構年報 三号 九月

コメント・フィールド／データ／アウトプット 科学史研究 二六四号 十二月

「文学」というフィールド、「共同」の夢―「文学者・桑原武

夫」をあらためて考える 慶応義塾大学出版会HP 一月

今和次郎の歩き方―『日本の民家』再訪の旅から『KAW
ADE道の手帖 今和次郎と考現学 暮らしの「今」をと
らえた〈目〉と〈手〉』 河出書房新社 一月

ユネスコ無形文化遺産になるということ―奥能登のアエノコ
トの二一世紀 岩本通弥編『世界遺産時代の民俗学』
風響社 二月

要旨…私が資料について感じる二三のこと―京大文化史学派
研究から 宗教研究 三七五号 三月

民研本転々録―民族研究所蔵書の戦中と戦後『国際常民文
化研究叢書 4 第二次大戦中および占領期の民族学・文
化人類学』 神奈川大学国際常民文化研究機構 三月

多賀城市八幡地区『東日本大震災に伴う被災した民俗文化
財調査二〇一二年度報告集』
東北大学東北アジア研究センター 三月

金 志 玟
傳・訣・經―上清經の形式についての略論
中國思想史研究 三四号 三月

金 文 京

東亞漢文訓読起源与仏經漢訳之關係―兼談其相關語言觀及世
界觀 日語学習与研究 四月
三人閑談「漢詩を楽しむ」 三田評論 一一五五号 四月
福澤諭吉の漢詩14『民情一新』完成と中上川彦次郎との詩

の応酬 福澤手帳 一五三号 六月

『萍遇録』と「兼葭堂雅集圖」―十八世紀末日朝交流の側
面 東方学 一二四輯 七月

毘沙門信仰による都市伝説と預言書 東アジアの今昔物語―
翻訳・変成・予言 勉誠出版 七月

●水戸黄門漫遊考 講談社学術文庫 八月

福澤諭吉の漢詩15 花火と贗札事件―人生は劇場、すべては
見戯 福澤手帳 一五四号 九月

王昭君変文考 項楚先生欣開八秩頌壽文集 中華書局 九月
●李白―漂泊の詩人その夢と現実 岩波書店 十月

新発見の朝鮮銅活字本『三國志通俗演義』について 林田慎
之助博士傘寿記念三國志論集 汲古書院 十月

東アジアの三國志演義 アジア情報室通報 十巻四号
座談会「漢文文化圏と古代日本」 国立国会図書館 十二月

古代日中比較文学についての断想―読むことと書くこと
アナホリッシュ国文学 一号 十二月
古代文学 五二号 三月

日 下 涉

書評 藤原帰一・永野善子編著『アメリカの影のもと―日
本とフィリピン』 アジア研究 五八巻一・二号 四月
境界線を浸食する「癒しの共同性」―接触領域としての在日
フィリピン人社会 コンタクト・ゾーン 五号 三月
●反市民の政治学―フィリピンの民主主義と道徳

法政大学出版社 三月

久保昭博

翻訳 レーモン・クノー『はまむぎ』 水声社 六月

墓碑と文学 ふらんす 八七卷七号 七月

文学史をひらく ふらんす 八七卷十一号 十一月

あなたは誰? わたしはどこ?—歌謡曲のフィクション論のために 大浦康介編『フィクション論への誘い』

世界思想社 一月

ケーテ・ハンブルガー『文学の論理』 大浦康介編『フィクション論への誘い』

世界思想社 一月

ジャン・マリイ・シェフェール『なぜフィクションか?』

世界思想社 一月

大浦康介編『フィクション論への誘い』

世界思想社 一月

拝啓、レーモン・クノー様 ふらんす 八八卷三号 三月

小池郁子

コンタクト・ゾーンとしてのオリシヤ崇拜運動—アフリカ系

アメリカ人の社会運動とキューバのアフリカ系宗教との境

界をめぐる 田中雅一・小池郁子編『コンタクト・ゾー

ンの人文学・宗教実践』 晃洋書房 十一月

黒人運動にみる宗教的家族組織の形成—米国のオリシヤ崇拜

より 宗教研究 八六卷三七五号 三月

古勝隆一

論魏晋南北朝之积淀 余欣編『中古時代の礼儀、宗教与制

度』 上海古籍出版社 六月

徐邈音義中的去声問題

中国経学 広西師範大学出版社 十月

小関隆

第一次世界大戦研究の現段階…京都大学人文科学研究所の共

同研究を中心に 西洋史学 二四五号 六月

歴史叙述と「想像力」…戯曲を素材に 大浦康介編『フィク

ション論への誘い…文学・歴史・遊び・人間』 世界思想社 一月

高井たかね

明清居住空間考—八仙卓と庁堂を中心に 『第一回 Temple-

ton 東アジアの科学と宗教 国際ワークシヨップ「東アジ

ア世界の「知」の伝統…科学と思想、宗教のあいだ」論文

集』 六月

명청시대 거주공간에 관한 고찰—八仙卓과 廳堂을 중

심으로 제1회 템플턴 동아시아의 과학과 종교 국

제워크숍 「동아시아 세계의 지식의 전통…과학, 사

상, 종교」 六月

高木博志

Fabricating Antiquity in Modern Nara. ZINBUN 43.

二〇一二年三月
「継体天皇陵」の近現代 新修茨木市史年報 一〇号

二〇一二年三月

陵墓の近代と「国史」像―文化財と「伝説」を通じて「陵墓限定公開」三〇周年記念シンポジウム実行委員会編
『「陵墓」を考える 陵墓公開運動の三〇年』

新泉社 六月

近代古都研究班とフィールドワーク 人文 五九号 六月

陵墓「保全」の不可解さ、近代の改変ふまえた古墳管理必要
朝日新聞 八月二十二日

現地保存の歴史と課題―地域の文化財は地域のもの

日本史研究 六〇二号 十月

京都のイメージはどのように創られたか?―平安文化論の成立 ファン・ジョンヨン編『古都の近代』

東国大学出版部(ソウル) 十一月

地域の文化財は地域のもの 京都新聞 一月十三日

日本史研究会の歩みと今後の課題、岩井忠熊氏に聞く(聞き手)
日本史研究 六〇五号 一月

近代日本と神武建国物語 大浦康介編『フィクション論への誘い』
世界思想社 一月

日本美術史／朝鮮美術史の成立 岩本通弥編『世界遺産時代の民俗学』
風響社 二月

高 階 絵里加

木村武山『祇王祇女』

國華 一四〇〇号 六月

第一次世界大戦と二つの日本漫画 人文 五九号 六月

「恤兵美術展覧会」について―第一次世界大戦と美術家たち

近代画説 二一号 十二月

夢・自然・記憶の色 中山玲佳の世界『中山玲佳 Sleeping Diary 2012-1996』 MORIYU GALLERY 十二月

美術逍遙 日本経済新聞(夕刊)

四月二日、五月七日、五月十四日、六月一日、六月一

八日、七月二三日、七月三〇日、八月二七日、九月三日、

一〇月一五日、一〇月二二日、十一月九日、十一月二六日、一月七日、一月二二日、二月二五日、三月四日

高 田 時 雄

搖籃時代的歐洲漢語課本 日本東方學 二輯 三月

〔解説〕平定金川戦圖『乾隆得勝圖 平定金川戦圖』

臨川書店 五月

俄藏利瑪竇《世界地圖》札記 《輿地、考古與史學新説 李孝聰教授榮休紀念論文集》 六月

〔解説〕平定廓爾喀戰圖『乾隆得勝圖 平定廓爾喀戰圖』

臨川書店 十月

竹 沢 泰 子

皮膚の色が意味するもの―人種と人種主義 『国際シンポジ

ウム報告書Ⅲ』からだゝが語る人類文化―形質から文化まで』 国際常民文化研究機構・神奈川大学日本常民文化研

究所 七月

日本人移民の歴史と多文化共生社会の明日 『京都大学附置
研究所・センターシンポジウム報告書Ⅲ 京都からの提言
— 21世紀の日本を考える (第7回) 「明日の社会の未来
像」』

医道の日本 八二七号 八月
宋儒の『素問』成立年代考—医経を読んだ人々(三)
医道の日本 八二八号 九月
運氣論を流行らせたのは誰か—医経を読んだ人々(四)
医道の日本 八二九号 十月

●人種神話を解体する 京都大学人文科学研究所国際シンポジ
ウム報告書 京都大学人文科学研究所 三月

蘇・沈が語る良方と善医—医経を読んだ人々(五)

●人種表象の日本型グローバル研究 平成24年度研究成果報告
書 京都大学人文科学研究所 三月

七草粥の習俗と健康思想 医道の日本 八三〇号 十一月
病魔退散の正月習俗 医道の日本 八三二号 一月
名宰相デリーの探偵術と鍼技 医道の日本 八三三号 二月

●*Nihkei Studies and Beyond: Dialogue Between Scholars in
Japan and the U. S. Kyoto: Institute for Research in
Humanities*, 人種表象の日本型グローバル研究 平成24年
度研究成果報告書 別冊6、 Kyoto University 三月

入浴忌避と飲泉療法—東と西の温泉医学(一)
医道の日本 八三四号 三月

武田 時昌

五星会聚説の数理的考察(下)—秦漢における天文暦術の一
側面 中国思想史研究 三二二号 二〇一二年三月

●科研費成果報告書『軍隊がつくる社会／社会がつくる軍隊
(一)』本篇(共編) 二〇一二年三月

百歳長寿国の人生観—東洋的健康科学論(一)

Sexual Contact Zone in Occupied Japan: Discourses on
Japanese Prostitutes or *Panpan* for U. S. Military Ser-
vicemen. 田中雅一・上杉妙子編『軍隊がつくる社会／社

西洋の長生法と日本の展開—東洋的健康科学論(三)
医道の日本 八二三号 四月

会がつくる軍隊(一)』本篇 二〇一二年三月

健康の定義を再考する—東洋的健康科学論(四)
医道の日本 八二四号 五月

コメント1 田中雅一・上杉妙子編『軍隊がつくる社会／社

『太素』の訳稿とデータベース—医経を読んだ人々(一)
医道の日本 八二五号 六月

●科研費成果報告書『軍隊がつくる社会／社会がつくる軍隊
(二)』韓国レポート(共編) 二〇一二年三月

北宋の儒者、道士の素問読書法—医経を読んだ人々(二)

在韓米軍基地問題—犯罪と環境破壊 田中雅一・福浦厚子編

『軍隊がつくる社会／社会がつくる軍隊（2） 韓国レポート』

二〇一二年三月

韓国における反基地闘争—ソウル以北の事例をめぐって 田中雅一・福浦厚子編『軍隊がつくる社会／社会がつくる軍隊（2） 韓国レポート』

二〇一二年三月

●コンタクト・ゾーン五号（編集）

二〇一二年三月

共訳・ティモシー・フィッツジェラルド「なぜ国際関係論における宗教に注目するのか？」

人文学報

一〇二号 二〇一二年三月

●コンタクト・ゾーンの人文学3 Religious Practices／宗教実践（共編）

晃洋書房 十月

本書の構成 田中雅一・小池郁子編『コンタクト・ゾーンの人文学3 Religious Practices／宗教実践』

晃洋書房 十月

南アジアの宗教 山折哲雄監修『宗教の事典』

朝倉書店 十月

Sexual Contact Zone in Occupied Japan: Discourses on Japanese Prostitutes or *Panpan* for U.S. Military Servicemen. *Intersections: Gender and Sexuality in Asia and the Pacific* 31. December.

十二月

カースト 大澤真幸・吉見俊哉・鷲田清一編『現代社会学事典』

弘文堂 十二月

タミル人の自決要求（一九七〇年代）歴史学研究会編『世界史史料一一巻 二〇世紀の世界II 第二次世界大戦後・冷

戦と開発』

岩波書店 十二月

●世界宗教百科事典（共同編集）

丸善出版 十二月

南アジア・東南アジア宗教の概説（共著）

井上順孝ほか共

同編集『世界宗教百科事典』

丸善出版 十二月

Agency and Seduction: Against a Girardian Model of Society. Kaori Kawai (ed.) *Groups: The Evolution of Human Sociality*. Trans Pacific Press.

三月

制度と儀礼化あるいは儀礼行動 河合香史編『制度—人類社会の進化』

京都大学学術出版会 三月

儀礼 伊田久美子・木村涼子・熊安貴美江編『よくわかるジ

ェンダー・スタディーズ—人文社会科学から自然科学ま

で』

ミネルヴァ書房 三月

●コンタクト・ゾーンの人文学4 Postcolonial／ポストコロニアル（共編）

晃陽書房 三月

本書の構成 田中雅一・奥山直司編『コンタクト・ゾーンの人文学4 Postcolonial／ポストコロニアル』

晃洋書房 三月

●国際ワークショップ報告 越境するカワイイ!! 可愛い!!

Kawaii!（編集）

三月

南アジア『在留外国人の宗教事情に関する資料集—東南アジア・南アジア編』

文化庁事務課 三月

田中 祐理子

パストゥールとベルナルの「論争」—十九世紀医学のある転回点について 金森修編『合理性の考古学—フランスの

科学思想史』

東京大学出版会 十二月

●科学と表象―「病原菌」の歴史 名古屋大学出版会 三月

立木 康介

露出せよ、と現代文明は言う エピローグ

文藝 二〇一二年夏号 四月

●精神分析の名著（編著）

中公新書 五月

狂気の愛、狂女への愛、狂気のなかの愛―ブルトン、デュラス、ラカン 思想 二〇一二年第一〇号 十月

フィクションについて精神分析は何を語れるか―フロイト／

ラカンの観点から 大浦康介編『フィクション論への誘い―文学・歴史・遊び・人間』 世界思想社 一月

土口 史記

紹介 富谷至著『四字熟語の中国史』

古代文化 六四卷一号 六月

富永 茂樹

匂いと臭いのあいだ 明倫アート 一四五号

京都芸術センター 五月

白い夜の記憶 明倫アート 一四九号

京都芸術センター 九月

フロックコートのオルフェと着物をまとったユリディス 明倫アート 一五一号 京都芸術センター 十一月

啓蒙 フランス革命 ボードレール『現代社会学事典』

弘文堂 十一月

京都から見たバリ、パリから見た京都 F[Kyoto 三三二号

京都日仏協会 十二月

二〇一二年読書アンケート みすず 六一二号

みすず書房 一月

Message Kyo×Kyo Today 第三回公演チラシ

京都芸術センター 二月

省略と脱落 明倫アート 一五四号

京都芸術センター 二月

富谷 至

「伊豆の踊子」と帽子

土車 一二四号 九月

●Itaru Tomiya and Reinhard Emmerich (eds.) *Public Notion of Crime and Law in East Asia—Crime and Society in East Asia*. Kyoto University. 三月

The conception of fornication—From the Han Code to the Tang Code. Itaru Tomiya and Reinhard Emmerich (eds.) *Public Notion of Crime and Law in East Asia—Crime and Society in East Asia*. Kyoto University. 三月

藤井 俊之

ベンヤミンのイメージ論―クラゲスとシュレアリズムの間で 文明構造論 八号 九月

藤井 律之

●魏晉南朝の遷官制度

京都大学学術出版会 三月
南朝における外号將軍の再検討 科研費成果報告書『中国古代軍事制度の総合的研究』 三月

藤井 正人

The Jainiyya Samaveda Traditions and Manuscripts in South India. Saraju Rath (ed.), *Aspects of Manuscript Culture in South India*. Leiden: Brill. 七月

ヴェーダの復興—南インド・ケーララ州における古代と現代の接触 田中雅一・小池郁子編『コンタクト・ゾーンの人文学 第三卷—Religious Practices／宗教実践』

晃洋書房 十月
バラモン教 世界宗教百科事典編集委員会編『世界宗教百科事典』 丸善出版 十二月

船山 徹

Gunavarman and Some Earliest Examples of Ordination Platforms (*jetan*) in China. James A. Benn, Jinhua Chen, James Robson (eds.), *Images, Relics, and Legends: The Formation and Transformation of Buddhist Sacred Sites*. Oakville: Mosaic Press. 十二月

シムボムウム報告要旨 Scholastic Buddhism during the Liang. *Transactions of the International Conference of Eastern Studies* 57. The Tōhō gakkai (Institute of

Eastern Culture).

一月

『解深密經』勝義諦相品における先行文献引用の信頼性 원주『해심밀경소』의 승의제상품 연구(田測『解深密經疏』の勝義諦相品の研究) 韓國学中央研究院出版部 一月

Buddhist Theories of Bodhisattva Practice as Adopted by Daoists. *Cahiers d'Extrême-Asie* 20 (2011). 二月

水野 直樹

(パネル報告総括) 新出資料「デ・ラランデの京城都市構想図」をめぐる 朝鮮史研究会会報 一八七号 四月

平壤で考えた植民地支配の歴史 朝鮮新報 六月二七日
在日コリアンの参政権はどうして消えたか?—戦後日本の出発と「外国人」の法的地位 메레ックブックレット Vol.2

多民族共生人權教育センター 七月
一九二〇年代大阪における労働下宿—朝鮮人労働者の定着過程と関連して 제1회 국제한술대회논문집『재일코리안 디아스포라의 형성과 전개—이주와 정주를 중심으로』 청암대학교 재일코리안연구소 八月

『근세국주의의 식민 지배 후자의 조직 외지음(박진한 외하)』『소군/천하/국민—일본의 역사』 서해문집 八月

●水野直樹・庵途由香・酒井裕美・勝村誠編著『図録 植民地朝鮮に生きる—韓国・民族問題研究所所蔵資料から』 岩波書店 十月

伊藤博文の「メモ」は「韓国統治構想」といえるものか—伊

藤之雄氏の所説への疑問 日本史研究 六〇二号 十月

部落解放運動に献身した朝鮮人仏教者―朝野温知(李壽龍)の歩み 部落解放 六六九号 十一月

サンフランシスコ講和条約前後―在日コリアンの法的問題と現在の課題 SAI 六八号

大阪国際理解教育研究センター 十二月
日本帝國大學の 朝鮮人留學生 研究(Ⅰ)―京都帝國大學
조선유학생의 현황, 사회경제적 출신 배경, 졸업 후
경력을 중심으로(鄭鍾賢と共著)

대동문화연구 八〇集 十二月
박태원의 생애를 담고 있는『운명의 선택』소개 근대서지 六号 十二月

A Propaganda Film Subverting Ethnic Hierarchy?: "Suicide Squad at the Watchtower" and Colonial Korea
Cross-Currents EJournal No.5 十二月

『おふだ』と町内会 グローブ 七二号

世界人權問題研究センター 一月

咸鏡北道における思想浄化工作と郷約・自衛団 松田利彦・陳延媛編『地域社会から見る帝国日本と植民地』

思文閣出版 三月

宮 紀子

遊牧国家におけるケシク制 平成二四年度研究報告書 四九号
三島海雲記念財団 十一月

宮 宅 潔

漢代官僚組織の最下層―「官」と「民」のはざま

●科研費成果報告書『中国古代軍事制度の総合的研究』 三月
東方学報 八七冊 十二月

秦の戦役史と遠征軍の構成―昭襄王期から秦王政まで 科研
費成果報告書『中国古代軍事制度の総合的研究』 三月

Crime and Impurity in Early China. Itaru Tomiya and
Reinhard Emmerich (eds.) *Public Notion of Crime and
Law in East Asia—Crime and Society in East Asia*,
Kyoto University. 三月

麥 谷 邦 夫

『道教義樞』序文に見える「王家八竝」をめぐって―道教教
理學と三論學派の論法 中国思想史研究 三三三号 十二月

村 上 衛

經濟史 岡本隆司・吉澤誠一郎編『近代中国研究入門』

清末の沿海經濟史、中国經濟史関係史料の紹介Ⅰ 清末 八月
久保亨編『中国經濟史入門』 東京大学出版会 九月

書評 黨武彦『清代經濟政策史の研究』
社会經濟史学 七八卷三号 十一月

翻訳 桑兵「近代「中国哲学」の起源」石川慎浩・狭間直樹
編『近代東アジアにおける翻訳概念の展開』
京都大学人文科学研究所 一月

●海の近代中国―福建人の活動とイギリス・清朝

名古屋大学出版会 二月

The Opium Trade and the Transformation of the Maritime Trade System in Pre-Opium War China: A Reexamination, *Modern Asian Studies Review* 4, Toyo Bunko, 三月

"Traitors" and the Qing Government Policies Directed at the Coastal Residents of Fujian and Guangdong at the Time of the Opium War, *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko* 70, Toyo Bunko, 三月

守 岡 知 彦

漢字字形データベースと文字オントロジーのデータ統合の可能性について 情処研報 2012-CH-94(8) 五月

古典中国語の形態素解析器を作る 人文 五九号 六月

古典中国語形態素解析のための品詞体系再構築(共著)『じんもんこん2012』論文集 情報処理学会シンポジウム シリーズ Vol. 2012, No. 7 十一月

CHISEの階層的素性名のRDF化の試みについて 情処研報 2013-CH-97(3) 一月

計算機アーキテクチャーの変化の波を越えるために

人文情報学月報 一八号 一月
漢字構造情報のRDF化の試み 公開シンポジウム『すべてをコンピュータの中に(繋がってしまったデータとその未来)』報告書 二月

多粒度漢字構造情報のための包摂標準機械可読化の試み 東洋学へのコンピュータ利用 第24回研究セミナー 三月

矢 木 毅

高麗時代の兼職制について 東方学報 八七冊 十二月

安 岡 孝 一

タイプライターに魅せられた男たち…ドナルド・マレー三省堂ワードワイズ・ウェブ 四月五日、一二日

人名用漢字の新字旧字:「巫」は常用平易か 三省堂ワードワイズ・ウェブ 四月一九日、二六日、五月三日、一〇日、一七日

タイプライターに魅せられた男たち…オーガスト・ドボラック 三省堂ワードワイズ・ウェブ 五月二四日、三一日、六月七日、一四日、二一日、二八日、七月五日、一二日、一九日、二六日、八月二日、九日、一六日

日本の文字とUnicode 大修館書店WEB国語教室

五月二五日、六月八日、二五日、七月一〇日、二五日、八月一〇日、二七日、九月一〇日、二五日、十月一〇日、二五日、十一月一二日

タイプライターに魅せられた男たち…黒沢貞次郎 三省堂ワードワイズ・ウェブ

八月二三日、三〇日、九月六日、一三日、二〇日、二七日、十月四日、一一日、一八日、二五日、十一月一日、

八日、一五日

古典中国語形態素解析のための品詞体系再構築 人文科学
とコンピュータシミュレーション『じんもんこん2012』論文
集 十一月

拓本文字データベースの設計とその応用 石塚晴通編『漢字
字体史研究』 勉誠出版 十一月

タイプライターに魅せられた男たち…谷村貞治 三省堂ワー
ドワイズ・ウェブ

十一月二日、二九日、十二月六日、一三日、二〇日、
二七日、一月一〇日、一七日、二四日、三一日、二月七
日、一四日、二一日、二八日、三月七日

拓本文字データベースの現状と課題 情報処理学会研究報告
『人文科学とコンピュータ』 一月二五日

住民基本台帳ネットワーク統一文字とその問題点

情報管理 五五巻一一号 二月

人名用漢字の新字旧字…「浚」は常用平易か 三省堂ワー
ドワイズ・ウェブ 三月一四日、二一日、二八日、四月四日

ITS vs UCS 東洋学へのコンピュータ利用 第二四回研究
セミナー 三月一五日

イベントレポート「東洋学へのコンピュータ利用」第二四回
研究セミナー 人文情報学月報 二〇号 三月

山崎 岳

海から見た歴史（共著） 東京大学出版会 一月
張鑑「文徵明平倭圖記」の基礎的考証および訳注—中国国家

博物館所蔵『抗倭図巻』に見る胡宗憲と徐海？

東京大学史料編纂所研究紀要 二三号 三月
妙智院所蔵『初渡集』巻中・翻刻（共著） 中島楽章・伊藤
幸司編『寧波と博多』（『東アジア海域叢書』第一一巻）
汲古書院 三月

山室 信 一

大正百年 現代のことば 京都新聞（夕刊） 四月一九日
決める政治 現代のことば 京都新聞（夕刊） 六月二九日

●『사상과 제로서의 아시아, 그 이후』(思想課題としてのア
ジア、その後) ソウル・J&C 六月

第一次世界大戦から ニュースの本棚

朝日新聞 八月二二日

原発比率 現代のことば 京都新聞（夕刊） 八月二三日

開館10周年 現代のことば 京都新聞（夕刊） 一〇月一八日

東アジア外交と安全保障 土佐弘之氏との対談

朝日新聞（夕刊） 一二月一九日

選挙の正当性 現代のことば

京都新聞（夕刊） 一二月二〇日

蘇峰—94年の軌跡

熊本日新聞 一月一日

連鎖視点からみる辛亥革命と日本 経済史研究 一六号 大阪経済大学日本経済史研究所 一月

核拡散防止 現代のことば 京都新聞（夕刊） 二月二一日

私の図書館巡歴と関西館—史料に導かれた連鎖視点への歩み

国立国会図書館月報 六二三号 二月

人

文

第六〇号

二〇一三年六月三十日

京都大学人文科学研究所発行

共同印刷工業

非売品